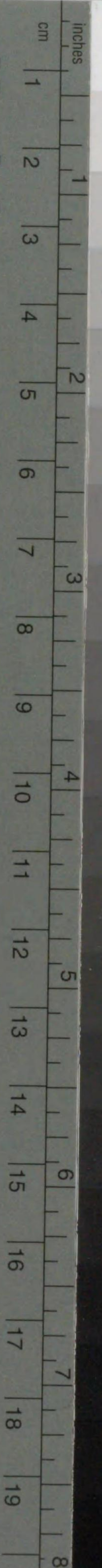


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

- A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

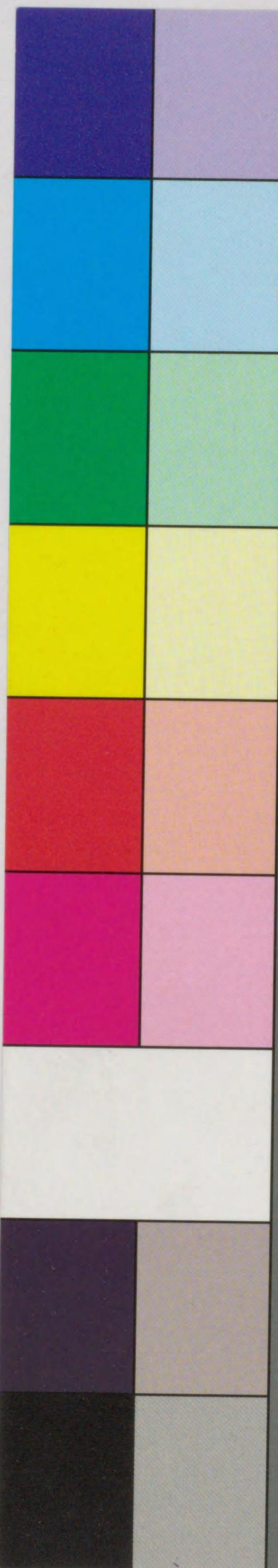
Red

Magenta

White

3/Color

Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak

系大學美スプリ

册分二十第

術藝寫描的飾裝と裝修

譯全松末垣稻

版藏館文同京東

100



冊分二十第

稻垣末松全譯

修裝と裝飾的描寫藝術

東京

株式會社

同文館藏版



563-84

目次

第一章 修裝的藝術の種類……………二五九

一 表面修裝の一般的意義(二五九) 二 技工的模寫修裝(二五三) 三 意匠修裝と構造修裝(二五六)

四 裝飾的修裝(二四五)

第二章 裝飾的彫塑……………一五四九

一 一般の裝飾的描寫藝術(二五四) 二 裝飾的彫塑への移行(二五五) 三 裝飾的彫塑への段階(二五七)

第三章 裝飾的平面描寫藝術……………一五六八

一 裝飾的平面描寫藝術に關する總説(二五六) 二 裝飾的描寫の二重の活動法則、それに對する實例(二五七) 三 以上の外の實例(二五〇) 四 壁畫(二五八) 五 裝飾的特質の特殊の條件(二五七)

第四章 裝飾的の平面描寫藝術と彫塑とに對する細説……………一五九二

一 臺と棹との分割的效果と結合的效果(二五三) 二 棹と臺との缺損條件(二五八) 三 裝飾的描寫と純描寫とに於ける描寫物及び描寫用空間(二六三)

目次



第六篇 修装と裝飾的描寫藝術

第一章 修裝的藝術の種類

一 表面修裝の一般的意義



吾人は今再び一般の技工的形體の裝飾形といふものに迄復歸して考察して見よう。抑もかの技工的藝術品に於ては、よしや單に便利なる一の細工形といふものと、之を唯外面的に包裝する所の藝術形といふものとが區別される事能きず。之に反し或る意義に於ては、各の形は藝術形であるとはいふものゝ、それかというて尙、既に述べたる如く、藝術形の段階といふものは、區別され得るのであつて、かゝる段階たるや、彼の相互から區別する事能きなくある所の層と同様に、内部から外部に迄繼續をなすのである。此の際に於ては、各の續行する所の層なるものは、それに行する所のものに關しては「裝飾形」と呼ばれ、又前行する所のものは、續行する所のものに關して「基本形」と呼ばれ得る。之を例へていふと、「アッチク」礎石が分員して生じたるもの、即ち(一)波狀刳形と(二)尖小形と尙一の(三)波狀刳形とは、地面上に於ける礎石の展開と柱身の方への狹縮といふ。單一なる形に對する裝飾形である。即ち此等の單一なる形は、右の三種の形に對しては、基本形である。次に吾人は、表面、例へば波狀刳形の表面をして、その波狀刳形に對しては裝飾形となるといふ形を有せしむる事

ができる。即ち此の波狀彫形をば、その基本形となさしめ得るのを見る。一例を挙げると、波狀彫形の表面をして裝用紐の形を呈せしめ得る。それから、波狀彫形、尖小形、及び尙一の波狀彫形といふ三者の繼起に於て、右の礎石の展開、柱身への狹縮といふ第一次的基本形なるものは、活躍的になされ、さうしてそれ自身の中に於て分化をされる。又之と同様に、波狀彫形といふものも、裝用紐の形によつて活躍的になされ、且つ分化せらるるのである。

されど此の際、吾人は、此の裝用紐といふものが、波狀彫形の表面を裝飾するといふ事實を重視する。此の種の紐は、かゝる表面の上に畫かれ、若くは浮彫技巧によつて描出される。そこで、此の如く一の基本形に對し、その表面の上に畫かれたり、彫られたり、若くはその他の技巧によつて附着せしめられたる裝飾形をば、吾人は特に修裝、即ち修裝形と稱する。併し此の際、勿論許容されねばならぬのは、修裝的の裝飾形なるものは、その基本形並にその變化したものと、嚴密に區別されないとはいふ事である。一例を挙げると、柱の丸溝なるものはいふ迄もなく、全體としては圓くある所の、柱の形に對する表面的附加物である。之丈の限りに於ては、之はかゝる基本形の修裝と稱する事ができる。併し他方に於ては、此の丸溝は、波狀彫形、尖小形、及び尙一の波狀彫形に迄分員をなせる礎石の一の段階の上に立つのである。此の故に、之は又、此等の三者と同様に、一の基本形、又は此の基本形の變化したものと呼ぶ事ができる。

併し又、修裝の一つの種類といふものは、各の場合に於て、全然特異なるものとして現出する。而もかく述べると共に、先第一に言明せらるゝのは、吾人が茲で修裝の種々の種類を區別しようとして居るといふ事である。

此の際、特に吾人は、かゝる修裝が取材せらるゝ所の種々の範圍に迄想到する。その第一の範圍といふものは、一般的の空間生活といふ範圍である。さうして之から取材された所の修裝を稱して、吾人は單なる線狀修裝と呼ぶ。之に屬するものは、第一にかの丸溝である。即ち吾人にしで若しも之を一の修裝と呼ぶならば、然るのである。更に他方に於て之に屬するものは、假りにどこかに畫かれてあると吾人が思念する所の線狀アラベスクン修裝である。これに反し第二の範圍としては、修裝といふものが、具體的實現の特定の範圍、例へば植物界、動物の形若くは人間の形から取材される。さうして此の第二種の範圍といふものは、吾人が右に眼中に置いた所の特殊の種類のものである。此の種の修裝は現實を再生する。之は描寫修裝なるものである。換言すれば、技工的藝術品の比喩的言語といふ種類に屬するものである。

されど斯かる具體的現實の範圍に迄は、技工的範圍から取材された所の修裝といふものも屬する。さうして吾人は茲では、特に之を説示しようと思ふ。之を例へていふと、鍛鐵の形、又は織物藝術に屬して居つて、建築に迄移植された所の形の如きである。此の如き修裝も亦、模寫修裝である。此等に於ても、或るものが再生されるさうして再生されたものは、正しく技工的藝術の産物である。して又、之が再生されるといふ事は、「それが唯理的に存在して居る」といふ事を言明するのである。

此の如くある事の反對に、建築的集塊、即ち建築物といふものは、物理的現實性を有する。そこで例へていふと、石といふ物理的現實の集塊に對し、當該建築物を修裝するに至る所の技工的産物の形といふものが、移植される。併し斯くあればとて、その形に該當する所の實物が、その形の移植されてある所の建築物の場所に於て、

物理的現實性のもとして存在するには至らない。之に反し之は、此の如き場所に於て單に描出されてある。簡言すれば唯理念的に存在し居るのである。さうしてそれが正しく此の如くあるといふ事は、かゝる修装をば描寫修装となすに至らしむるのである。之に對する實例といふものは、既に柱の礎石の波狀彫形の上に再生された壁が示すのである。

但し此の際、次の事に留意せねばならぬ、曰く、裝用紐なるものは、決して波狀彫形中に存在する所の屈伏及び彈力的抵抗をば、その裝用紐の中に包有さるゝ所のものと認むべくあるといふ事を言明しない。之に反し、之によりては唯、波狀彫形中に於て、裝用紐なしに既に何が存在するかといふ事のみが言明されると。之を言ひ換へると、波狀彫形なるものは、裝用紐によりて、或る他のものとして特徴づけらるゝに至らない。之に反し、それが止しく實際ある所のものとして特徴づけられる。併し又、此の如き特徴といふものは、その特異なる意義を有する。さうして之に關しては二種の動力が區別さるべくある。

第一には、屈伏並に彈力的抵抗といふ思想は、裝用紐の中に於て、云はゞより詳密に描出されてある。言ひ換へると、波狀彫形中に於て、各の點、又は、各の部分に於て、それかというてそれ等の劃然たる區別なしに、起生する所の屈伏及び抵抗といふものは、裝用紐の中に於ては、判明に分化されてある。即ち多様な屈伏及び抵抗、それ等のより豊富なる活動に迄分解されてある。而も此の如くなる事により、兩者が意義と印象力とを増加せしめられる。さうして第二の動力とは、上に特に重視した所のものであつて、即ち裝用紐なるものは、かゝる場所に於てそれ自身として考察されるといふと、異他無縁なる或るものである。即ち事物的には全然之に附屬し

ないものであるといふ事である。併し又、かゝる異他無縁性といふものは、一種特異なる方法に於て、裝用紐を有する波狀彫形中に共通的に存する所のものゝ印象性を増進するに至るのである。

二 技工的の模寫修装

吾人は今、上述の如き修装中に存する所の事實關係の中からして、その主要なる點を尙一度取出して特に攻究して見よう。本來かの裝用紐なるものは、一の描寫物である。詳しくいふと、波狀彫形なるものは、現實の裝用紐によつて取巻かれて、その要する所の堅確性を始めて取得しなければ、又裝用紐が柱身を支持するかの如き思想も、そこに喚起されない。之に反し波狀彫形そのものが之を支持する。併しながら同時に、波狀彫形と稱せらるゝかゝる現實的なる物といふものゝ本性は、裝用紐といふものゝ描寫的再生により圖解せらるゝに至るのである。

されど此の際に於ても亦、現實的のものと、唯理念的に存在するもの、事物と描寫物との間の十分判明なる反對性といふものは、顯著なる美的意義を有する。そこで、現實的裝用紐などといふ思想は矛盾である。之は恰もかのコリントの柱頭に於て、線盤の重壓によつて屈折せらるゝといふ現實的葉なる思想、又は女像柱に於て、現實的に支持をなす所の人間といふ思想と同様に、矛盾して居る。さうしてそれが正しく此の如くあるが故に、彼れが如き現實的裝用紐と云思想は、想絶對的に除却されてあらねばならぬ。而も之が爲には、兩世界、即ち一方に於ては建築の世界、他方に於ては織物上の形體の世界といふものゝ絶對的差異なるものが役立つ。吾人は吾人

の思想に於て、直接に、此の兩世界をば、全然異なりたるものとして認識する事により、他の點に於ても、十分なる自明を以て、兩者を自然に町別する。そこで一方に於ては現實の世界、他方に於ては單に理念的に存在するもの、即ち描出再生の世界といふものを區別し得るやうになる。之を簡言すると、鑿用紐なるものは、吾人の直接的印象に對しては、全然それ自身から、而も何等の考慮なしに、修裝上の比喩的言語といふ要素として顯現し且つ此の如くなると共に、之は、修裝的描寫物の特異なる意義を取得するに至るのである。

之に反し、若しも基本形と裝飾的描寫物とが、現實界の同一の範圍に屬する時、例へていふと、建築物の或る部分に於て、一の建築物といふものが、その自稱的裝飾の目的の爲に畫かれかくて、現實の建築物が、畫かれたもの、即ち唯理念的に存在する所のものによつて活躍さるゝといふが如き時には、右の兩者が、吾人の思想に於て相互に交渉錯雜するといふ危険が発生する。吾人はかゝる場合には、同一のものが、或る時には把握し得べき現實中に於て吾人の前に立つのを見、他の時にはそれが畫かれてあるのを見る。さうして吾人は、今や兩者が直接に連結せられ、甲が乙を牽引し行くのを見る。而も此の如くなると共に、畫かれた建築物といふものは現實的の建築物と同一のものであるべき要求を起す。換言すると、之とて亦現實的のものにならうと要求するか、若くは此の逆に、現實的建築物が、畫かれたるものゝ如き様子をするやうになる。要するに、吾人が、吾人の眼前に見る所のものが、兩場合に於て同一のものであるといふ事即ち孰れもが建築物であるといふ事は、吾人を強制して、或る程度迄は、兩者が同一種類のものであるといふ判斷を下すに至らしむる。して又、畫かれたる建築物がよしや欺瞞をしようとの意圖なしにあるとはいへ、さり逆それは、大なり小なり此の如き意圖を有するやうに見

えたり、若くはその様に働いたりするのである。

更に之より發生する所の効果といふものは、いつでも、次のやうな場合に發生する所のものに均しくある。その場合とは、吾人が、現實と假相、事物的のものと理念的のものと、覺醒中の體驗と夢想とを、嚴密なる區別なしに往來せしめたり、若くは欺瞞とそれの發見との間の「動搖」、に一任したりする場合である。之を一言で以て覆ふと、彼れが如く畫かれたる建築物によつて、建築物の或る部分に自稱的裝飾を施すが如きは、是決して裝飾ではなくて、之に反し各の藝術の最高の法則、即ち藝術的眞實といふ法則を濫用したり、之に違叛したりする事である。是は一種の街奇藝術である。特に此の如くなる事により、建築上の比喩的言語といふものゝ意義は消失するに至る。かゝる意義なるものは、吾人が、後になつて成立しない所の一の幻覺中に動搖せらるゝといふ事から成立しない。尙又之は、容易く看破せらるゝ所の虚偽からも成立しない。之に反し、一の眞實といふものが、明白々無疑惑なるものとして存現する所の一の描寫物により、吾人に對し、より進透的に爲さるゝといふ事から成立するのである。

吾人は此の上にも言明する事が能きる。建築物の上に建築物を畫くといふ事は、是いふ所の役割なるものゝ忘却である。即ち演技と現實とが相互の中に流入するに至る程、單に演ぜられた所作をば、現實に近接せしむる事であると、之はちやうど、かの俳優が、忿怒者の役を演じて居る間に、己れ自ら忿怒し、さうして此の如き様子をなすのに比較さるべくある。都合によると、觀客は、かゝる俳優の演技をば特に自然的のものと感ずるかも知れぬ。併しながら此の如き自然的といふ事は、是藝術を破滅するものである。さうして吾人が、既に古代羅馬に

於て、此の如き街奇藝術に接し居るといふ事は、決して、街奇藝術としてのその性質を變更するには至らないのである。

三 意匠修装と構造修装

以上に於て、吾人は、修装の材料を取出し得べき範圍の事に就いて論究した。さうして之に於ける根本的の兩對立者といふものは、一方に於ては抽象性の空間的の修装、他方に於ては摸倣再生をなす所の描寫修装であつた。それから又、斯かる兩對立對者の外に、修装と被修装物との關係に關する兩對立者もあつて、之に就いても上に既に語つた。併し之に關する問題は、今、より一般的に、而も同時に又、より特殊的に、提起さるべくある。けだし修装が、その基本形に依從するといふ事には、異種雜多にして結極無限なる程度といふものがある。更に又一般に、修装がその基本形に對する關係にも、多様な種類がある。そこで此等に就いて以下論究しようと思ふ。併しその前に、之を一般的に語つて見よう。

抑も一の技的藝術品の部分、例へば建築物の部分、表面なるものは、一方に於ては、その表面の下部にある實體と、最も密接なる關係に立つ。されど他方に於ては、かゝる表面といふものは、その表面の下部にある實體、若くは其のものゝ集塊とは、思想に於て區別し得べきものである。之は又、限界面としては、限界されたものに對立する所のもの、即ちそれの上に浮泛し居る所の或るものである。

さうして此の如き斷定は、いふ迄もなく、表面を裝飾する所の修装に迄も適用され得る。之を詳言すると、修

装とその基本形とは、全然たる空間的統一、同時に又、一種特異なる遠隔といふ關係に立つ。併し空間的の統一といふものは、内部的本質の統一を要求し、さうして特異なる遠隔といふものは、之に反し、同時に基本形に對する修装といふものに、特殊の自由を與ふるに至るのである。

吾人は今茲で、修装に就いて語らうとするのであるが、之が爲には、彫塑的表面修装と繪畫的表修装とを眼中に置く。但し又、主として後者を取上げる事にする。

既に前に、吾人は表面裝飾といふものに就いて語つた。されど此の際には、表面といふものが、材料に關して考察された。之に反し吾人は今之をば、既に説示せる如く、かゝる材料から形成せらるゝ所の技的形體、並にその内部的本質に關して考察しようと思ふ。

此の際自然の勢として、吾人は修装の多様な種類を區別する。その第一は、意匠修装といふものであり、之に於ては、同一の形が繰返され、かくて一の平面を被覆する。次にかゝる修装に、吾人は第二のものとして、直に構造修装といふものを對立せしむる。

此の構造修装なるものは、裝飾せらるべき平面の構造上の差異、即ち官能上の差異を、追隨しながら特徴づける。之を例へていふと、一の部屋の直角的天井は、その中央から限界の方へ展開する。或はそこらその重點としての中央に於て統括される。之はその限界線に於て完結される。随つて又茲でも、中央に於けるよりも他の意義に於て「統括」される。次に、各の限界線は、その各自の中央に於て重點を有する。さうして終點に於ては、異なりたる方向の限界線が接觸し、さうして交互影響を及ぼす。

そこで此の種の事實關係をば、構造修裝なるものが活躍的に表出するのである。吾人は、例へていふと、天井の中央に於て、側面の方に展開する所の中央小片を見る。之は均齊的に凡ての方面に展開する。即ち四個の隅の方に向ひ、それから更に、限界線の四個の中央の方に向ふ。さうして縁に於ては、吾人を、統括をなす所の縁附を見る。或は限界の主要點たる隅が顯著にされるさうして恐らくは尙此の外に、いつでも、縁の線の中央から、修裝的の反對運動が、中央からの運動に對接する。此の如き構造修裝は、平面をして、それ自身の中の存在を取得主張し、且つそれが屬する所の全體に迄適入を遂げしむるといふ働作、並に働作の交互影響をば、分化したり圖解したりしながら、卓出せしむる。

之に反し意匠修裝なるものは、此の如き構造上の差異に對しては無關心の中性的態度に出づる。併しその此の如くあるといふ事は、それが平面の本質と何等の内部的連絡を有しないといふ事を意味するには至らない。

併しながら意匠に修裝に對しては、多様な見地といふものを取る事が能きる。その中でも必要なるものは、次の如き見地である。一の技工的藝術品の平面部が、一のより廣大なる全體の部分となり、且つかゝる平面部そのものも亦、多くの部分から成立するといふ事である。

此の場合には、統一的の平面に於て、到る所に同一の部分、同一の方法に於て、相互に附加される。して又此の如くある結果、その平面といふものは、判然、到る所に同一の方法に於て結合されてさうして統一的全體に迄綜織せらるゝ所の、同種的全體から成立するものとして觀照され得る。試みに、之に就いては、煉瓦から

構成せられ、さうして石灰上面層を附備せられたる壁又は塀に就き思念したらよい。此の種の壁又は塀は、全體

としては、其の異なりたる部分に於て異なりたる有様に官能する。例へていふと、茲では開始し、かしこでは終止し、茲では展開し、かしこでは限制し、忽にして重壓をしたり、忽にして重壓を消化したりするが如きである。されど之が全體として官能し得ん爲には、之は先第一に、此の如きものとしての存立を遂了せねばならぬ。

さうして之は、吾人が一般的に言明し得る如くに、同一の元素の同種なる綜織、又は同一の「動機」の不變にして且つ同種なる反復の爲に、全體としての存立を遂ぐる。勿論技工的藝術品の平面的に展開してそれ自身に於て統一的なる各の部分といふものは、此の如き方法に於て、比較的に獨立せる元素から構成されない。併し又各の場合に於て、之は一方に於ては全體として官能し、他方に於ては部分から綜織せらるゝのである。

して又、全體としての彼れが如き官能と同様に、他方に於ては、部分が全體に迄右の如く綜織せらるゝといふ事自體も、修裝的表出をなされべき權利を有する。けれど各の與へられたる場合に於て攻究すべきは、唯、何が、かゝる場合に於て、先第一に、全平面そのものに對し、且つその平面が屬する所のより廣い全體の中に於て特徴づけるものとして顯現し、又顯現し得るかといふ事である。さうして若しも同一の部分が、一の同質なる全體に迄同種的に綜織さるゝといふ事が、平面に對し特徴的のものであるか、又はかゝる動力が平面中に於て藝術的に高調され得るといふ性質をその平面が有するならば、然る時には、意匠修裝なるものは、之に對して適當なる方法である。それは、意匠修裝に於ては、正しく部分の同一性並に其の同種綜織といふものが、判然承認し實現せらるゝからである。

此の如き承認實現は、意匠修装に於ては次の如き方法によりて遂げられる。即ち之に於て先第一に、部分といふものが區別せられ、さうしてそれ丈の限りに於ては、一の不均一、即ち變化が作成せられ、或は平面の分化が企圖せられ、次に此の如く區別された部分が、相互同格的に對立せしめられ、且つ同一の方法に於て結合せられ、或は相互に迄移行したりするのである。此の如くして、同一性、即ち内部的同質性といふものは、定時現出性、而も同種類のもものが同一の方法に於て復歸するといふそれに迄變ずる。かういふ譯であるから、全體の同一性といふものをその部分によりて高調するといふ事は、先第一に、絶對的同一性の消滅を來さしむる。併し此の結果としては、同一性といふものが、活潑なる方法に於て、一方には、部分の同一性、他方には、その復歸の方法の同一性として二重化せられ、さうして之の限りに於ては、それが増進されて興起し、又斯かる手段により、判然たる直觀に供せらるゝに至る。總じて此の如き同一性を判然藝術的に高調するには、唯此のやうな方法にたよる外に途はない。更に此の際に於ても亦、藝術的の形態言語といふものにより、或る方法に於て、存在といふものが、活躍的の「消失及び回復」となるのである。

されど吾人はもう一步を進めて見よう。一の平面なるものは、先づ構造的に活動する。換言すれば、先づ己れ自らの方向、即ち己れ自らを展開せしめ居る所の方向に於て官能する。併し之は同時に、第三次元、即ち厚さの方向にも官能する。さうして之がその凡ての部分に於て同一の方法に於て此の次元に於て官能し、若くは凡ての部分に於てかゝる種類の同一の官能に迄己れを委するといふ事は、その本性である。

但し第三次元の方向への此の如き官能は、更に二様の事を言明する。第一に、かの天井とか被覆とか敷物とかは、その天井を附けられたるもの、被覆されたるもの、敷物されたるものに對して官能する。さうして斯かる官能の本性としては、特に、凡ての部分に於てそれが同種のものである。又之と共に、それ／＼の表面處置法によりて表出せらるゝに至る所の、天井とか被覆物とか敷物とかの本性といふものは説示される。併し又、表面處置の自然的方法といふものは、此の場合に於ても亦、意匠修装たるのである。

それから第二に、此の如き官能には、反對する所の方向に進み、且つ均しく第三次元に屬する所の官能といふものが對立する。簡言すると、内への官能に、外への官能が對立するのである。さうして此の外への方向に於ても亦、平面なるものは、その凡ての部分に於て、同一の方法に於て官能する。若くは同一の官能をなすべく用意して居る。随つて平面なるものは、かゝる點からも考察され得るのである。

之を例へていふと、居室の側壁なるものは直立する。之は支撐や支持をなす。之は、相互、並に床と天井とに對し、官能上の關係の立つ。されど同時に、之は居室を限制する。

ところが斯かる限制といふ事は、右のやうな構造的官能の差異と少しも關係する所がない。否此の如き限制といふ官能は、全然新なる方向、即ち圍繞されたる空間に對して進行する。さうして圍繞されたる空間のかゝる限制中に於て、壁面の各の點は、全然同一なる方法に於て官能する。若くは此の如くなすやうに、見え得る。

之と同様に、例へば床の上にある所の絨氈といふものは、上方に迄、到る所に同一の方法に於て官能したり、若くは同一の官能をなすやうに確定されて見ゆる。換言すれば、之は、己れの外の事物に對し、時としては、こゝ時としてはかしくこゝに於て、同種、的關係に於て現出すべく確定されて見ゆるのである。

此の際常に問題とすべきは、平面の此の如き考察法が、果して自然的、即ち適當であるや否やといふ事である之を例へていふと、絨氈が、その位置に於て不動的に存留するやうに見ゆる所の一の机の下の床の上に敷かれてあると假定する。ところが、斯かる絨氈なるものは、先第一に、己れ自身の中に、それが展開の出発點たる所の中央、並にそれが統括されてある所の限界といふものを有する。されど同時に、今爲されたる假定の下では、此の中央といふものは、特殊の方法に於て外に迄官能する。之は即ち机の中央に迄關係する。そこで絨氈と机といふものは、一の全體を形成する。而も此の如くして、机の中央といふものは、同時に絨氈の中央となる。又之により、絨氈の中央は、一の特別なる意義に於て、其の中央となる。さうして斯かる中央から、絨氈といふものは平等一様に展開し、更に此の中央に於て再び統括される。此の如き場合に於ては、絨氈に對し、之に該當する所の構造修裝を施すべきは當然の事である。

されど吾人は、かゝる絨氈に對し、吾人の思想に於て、恒久的にその外圍の事物に對し一定の關係に置かれな

い所の絨氈を存立せしむる。例へていふと、吾人は、可動的に床上に敷かるゝ絨氈を思念するのである。

かゝる絨氈は、あちらにもこちらにも移動され得る。さうしてそれが此の如くなり得るのはその本質となる。そこで若しも果して此の如くあるとするならば、然る時に、之は、その各個の部分に於て、區別なしに、時としては此の連絡、時としては彼の連絡中に内屬し得る。特に或る場合に於ては此の點、他の場合に於ては彼の點が主要點、即ち官能上の「中點」と爲されるさうしてよしや斯かる絨氈が固定されたいへ、尙その上に立ち、さうしてそれと官能上の關係に立つ所のものが、運動し得る。一例を挙げると、椅子なるものは、絨氈の時

としてはこゝ、時としてはあそこに置かれる。その中でも、吾人その人が、絨氈の上に於て、吾人自らを移動せしむる。即ち吾人は、絨氈の上で吾人自らを運動せしめ、かくて吾人自らが今はこゝ、次にはかしこを踏む。此の際吾人は、吾人が踏む所の場所をば、絨氈の一の主要點、即ち官能上の中點となす。されど吾人は、自由に絨氈の任意なる場所を踏み得る。而も此の如き吾人の自由は、冷淡無關心の事柄ではなくて、吾人自らに取りては重要な事柄である。されど之と同時に、絨氈といふものも、自由を取得する。即ち之は、構造上の中性を取得する。更に此の事も、それに對して重要である。今や此の絨氈の中には、吾人が之に對し、今はこゝ、次にはあそこで、右の同種的方法に於て吾人を行動せしむるといふ可能が存在するやうになる。絨氈なるものは、かゝる可能に對して己れを捧呈する。さうして此の點に於て、それ自體の本質の顯著容狀が存在する事になる。

して又、此の如き關係をば、吾人は均しく修裝的に表出する事が能きる。併し吾人は、此の事をば、構造に對して中性なる修裝によつて仕遂ぐる。そこで若しも絨氈にして此のやうなる修裝を有するならば、然る時に吾人は直接に、此の如き中性的修裝中に於て、吾人の自由を自視するかゝる自由は、實に此の中に於て直接に直觀的に爲され居るのである。

之と同様に、壁又は壁面の本性中には、二重のものが存在する。第一には、壁の特定の部分が、不可動なる物體に對し確固たる關係に立つといふ事である。第二には、かゝる部分が、時としてはこゝ、時としてはそこで、可動的の物體、若くは人間身體によつて接觸せられたり、或は此等に對し、同種的關係に立つたりする所の或るものとして顯現するといふ事である。此の如き中性も亦、意匠修裝によつて判明に承認し、實現される。

最後に、此の如き構造的・中性の尙他の種類として、吾人の衣服の織られたる質といふものが一の實例を供給する。抑も衣服に迄使用せられ、さうして同一の「質」の他の片と共に組成された一片の織物なるものは、かの柵の部分又は戸とか、柱とか、鴨居とか、若くは單なる壁柱小割板とかいふ如き建築物の部分のやうに、獨立的にしてそれ自身の中に完結される物ではない。之に反し、之は正しく一の「片」である。衣服といふ全體となつて始めて之は、統一的にしてそれ自身の中に完結される物となる。さうして斯かる全體は、身體との統一體になつた後に、此の如き特定の物となる。今や此の如き全體は、一方に於ては、身體に迄關係して、換言すればその全體中に於て現はれ居る所の身體の構造に迄關係して、構造的に修裝され得る。

されど他方に於ては、織物なるものは、右の如くあると共に、一の獨立的存在を有する。即ちそれ自らの生活を有する。但し之は、既に形成されたる物としてではなく、之に反し未だ形成されない質としてである。詳言すれば、之若くは彼の片が任意に切り取り得らるゝ所の材料、並にその凡ての部分に於て、同一の方法で、同一若くは異なりたる質の他の片と、構造上の關係に立たしめられ、衣服に於て可能なる之若くは彼の官能の帶有者、最後に、人間身體の之若くは彼の働きの帶有者となり得る所の材料としてである。さうして若しも織物にして、人間身體の衣服の部分として其の取得する所の形といふものを別にして、彼れが如き活躍的本質として、その凡ての部分に於て、同様の方法で、各の形成、限制、官能等の許容者として、その結果、その際己れに落下し來る所の官能の各差異に對し、その各個の部分に於て中性的に特徴づけられようと欲するならば、此の織物に對してはたゞ意匠修裝といふ可能が存する許りなのである。

四 裝飾的修裝

右に述べ來つたやうな構造修裝及び意匠修裝には、尙他の修裝が對立するのであつて、吾人は之を「自由裝飾的修裝」と稱する。之が實例としては、日本の屏風に施さるゝ裝飾といふものを擧ぐる事が能きる。即ちかゝる屏風の平面の右側に於ては、荆棘の一枝が發生され居り、さうして孰れも白い花を有する所の分枝が左方に迄伸展する。葦といふものは、直接に之と並列して、白い絹糸によつて表示された水中から生長され居る。又鳥は、枝の上に止つたり、或はそこに飛び來つたり、若くはそこから飛び去つたりする。更に又、蝶は、その邊に舞ひ居る。然かはいふものゝ、此の如く生長させられたり運動させられたり居る所の一切のものは、自由不羈にこれ等の行動をなし、さうして屏風の平面の左右、その限界及び中央等の構造的交互關係並に構造的均衡などに對しては、故意に無頓着なる態度に出で、同時にかゝる平面をば、何くに於ても分割するやうな事をしないのである。

而も此の如く述べ來る事により、自由裝飾的修裝といふものゝ意義が、一般的に説示せらるゝのである。即ち此の種の修裝は、先第一に、かの構造修裝に對し、判然たる反對に立つのである。されどその中でも力説すべきは、之が、一見之と類似して居るやうに見ゆる所の意匠修裝と反對に立つといふ事である。けだし意匠修裝の顯著なる點とする所のものは、一方に於ては、それが消極性のものであるといふ事、即ち構造の差異に對し無關心的中性を保持するといふ事である。更に他方に於ては、それが積極性のものであるといふ事、換言すれば、此の

意匠修裝に於て、構造の差異の判然たる承認實現の代りに現出せしむる所のものである。それは即ち同一にしてさうして同様に結合されたる元素から、平面が発生及び存立をなすといふ事の高調である。若くは又、凡ての部分が爲したり、又は爲さうとして居る所の役立ちといふもの、同一性たるのである。

かくて茲にいふ自由裝飾的修裝なるものは、次のやうな點に於て意匠修裝と異なる事になるそれは、それが常に、平面の構造の差異そのものに對し、常に中性を保持するのみならず、更に、平面の全體を構成する所の部分の同一性や、又官能若くはその官能に對する用意の同一性をも認めないといふ事である。此の種の修裝は、かのやうな構造的官能と少しも關係を保ちもしなければ、又部分、並に全體へのその結合とも、少しも關係を保たない。次に又、之は、部分並にその部分の官能の同一性に對する何等の關係をも、その中に帶有しないのである。

けだし裝飾的修裝に於ては、平面なるものは、既成の全體として假定されてある。之は、かゝる全體として、其の確固明白なる存在を有する。之は實際それ自身に於て、斯かる全體たるものである。さうして斯かる全體は裝飾的修裝に於ては、正しく此の如き明白にして且つそれ自身の中に完結的に存立する所の全體として考察される。即ち平面なるものは、彼れが如き既成の全體である事により、何等かの形體の自由なる發展に對する既成の舞臺として提供される。之は修裝に對し十分なる自由を許容する事により、己れ自らをば、かゝる既成の全體と宣明する。或は己れ自身の中に完結せる其の存在を主張する。さうして修裝なるものが、如何なる方法に於ても平面といふ統一體を構成する所の孰れかの部分か、又は平面がこゝ若くはかしこの部分に於て、己れ自身の中か又は外部に對して及ぼす所の官能かを指示し、さうして此の如くして己れ自らも全體を構成し、又はその内部的

本質を限定するといふなどの要求を提出しないと同時に、それは、それ自らの方に於ても、判然、平面の此の如き既成の統一體、並にそれがそれ自身に於てある所のものとしての其の存在を承認するのである。此の修裝は、一には、平面の部分並に差異に想到せしむる所の一切のもの、二には、平面を構成する所の部分の同一及び差異、三には、部分に於ける官能の同一及び差異などに對して、中性的に行動し、さうして既成的に與へられ、隨つてどこでも自由に使用し得べき舞臺の上に於て自由に運動する事により、平面から内部的に、即ちその本質に於て全然分離し、さうして斯くなると共に、他方に於ては、平面をして己れから分離せしめ、それをば、己れ自身の中に完結されありて、もはや發生するのではなくて存在し且つ部分から成立しないで、既成の統一體のものとして表現せしむるに至る。之を換言すると修裝といふものが、一の獨立の物として、平面の上に浮泛する事により平面に對してその十分なる獨立性を附與するのである。

又此の際均しく假定せらるゝのは、裝飾的修裝なるものは、平面の部分、並にその官能の同一及び差異、根本方向の差異、左右、内外の反對、部分並に交互的に働く所の官能の均衡等に對する各の關係を、故意に回避するといふ事である。尙又、彼れが如き同一及び差異、反對並に平面、即ち平面的展開物の成立に對して必要な所の均衡等をば、故意に看過するといふ事も假定される。此等の事たるや、特に次のやうな事を意味するのである。即ち修裝が、表面の限界によつて防遏切斷せられ、かくてその經過に於て制約されて顯現せず、之に反し、それが始終したりする所には、自由に己れ自身から、自己發展の十分自由なる活動に於て始終したりするやうに顯現せねばならぬといふ事である。

更に他方に於て、此の種の修装を適用するに就いての根本條件たるべきものは、之によつて裝飾せらるゝ所の平面が、實際に於て、かのやうな既成にしてそれ自身の中に完結的に存在するものとして顯現し、若くは此の如き光明に於て觀照され得るといふ事である。此の如き言明は、あらゆる種類の平面に對して成立する。それかというて又、彼れが如く觀照され得るといふ事は、時としてはより多く、時としてはより少く自然的であるのである。

此の事に關しては、吾人は特に次のやうな事を指示せねばならぬ。例へていふと、一の容器が、それ自身に於て既成のものとなり居り、さうして全體としてのかゝる既成の容器に對し、部分からのその全體の成立を顧慮せず、又官能の差異にも頓着なく、一の皮膚、即ち表面層といふものが作成せられ、かくて假漆や泐藥や漆が附加されるとする。此の如き場合に於ては、正しく此の種の中性的被覆により、形體といふものは、判然、それ自身の中に於ける既成的全體として特徴づけられて顯現する。さうして此の如くなる時には、修装が、自由なる裝飾的修装として表現するのは自然の事である。

或は尙他の可能を擧ぐる事が能きる。一の屏風といふものが、それ自身に於て既成のものとしてそこに立ち、さうして正しくその位置に於て存留する事により、そこに存在し、且つその限界内に於ける既成的存在及び展開により、空間を分割するに至るのである。此の際に於ては、もはや屏風の部分、又は、部分の相互間に於ける組織、若くは形體を發生するに至らしむる所の官能などは、問題とされない。之に反し、正しく彼れが如き既成的存在のみが問題とされる。此の場合に於ても亦、かの自由裝飾的修装といふものが、かゝる既成的存在を承認す

るのに適當して居る。さうして此の如き承認なるものは、平面が、何等かの形體の、十分自由にして、隨つて全然己れ自らの偶然的本質に合當する所の自己發展に對する自由なる舞臺となさるゝ事により、遂げられる。

最後に又、裝飾的修装の此の如き本質により、修装に對する動機、選擇といふものも確定される。之に對して先第一に適當する動機といふものは、外的規則なしに、隨つて偶然的に之々に、こゝでは此の方向、かしこではかの方向に於て發展し、自由にこゝ、そこに向注したり、浮泛したりするといふ性質を有するものである。修装の此の如き種類に於て第一等者である所のもの、即ち日本人が、如何に、發展の自由、換言すれば、偶然性といふものを顧慮してその動機を選択したかは、今更事々しく説示する必要はない。

第二章 裝飾的彫塑

一 一般の裝飾的描寫藝術

最後に吾人は、前章に於て述べた修装の種類からして、技工的形體の裝飾の最高種類といふものを區別するかゝる種類は、裝飾的描寫藝術、即ち裝飾的彫塑及び裝飾的繪畫中に存する。されど又、「裝飾的描寫藝術」といふ語を用ふるといふと、同時に、前章に於て述べたるが如き修装の種類に對し、根本的に新奇なる事實關係を説示し得るやうになるのである。

そこで吾人は問うて見よう。裝飾的描寫物或は描寫品とは如何なるものであるかと。吾人は答へよう。之は、

一方に於ては描寫物であり、他方に於ては、裝飾をしながら、即ち廣範圍の全體中に裝飾的に加入し、且つ此の如くなる事により、かゝる廣範圍に附屬し、若くは、その一部分として表現せらるゝものである。併し此の如き全體といふものは、いつでも一の技工的藝術品、特に建築的藝術品といふ全體である。随つて裝飾的描寫物なるものは、描寫物であると同時に、技工的藝術品の一部であるのである。

但し此の如く言明するといふと、先第一に、全然異質なる所のものが説示せらるゝのである。けだし描寫物なるものは、一の材料に對して異他無縁なる生活をば、その材料に迄移植したものである。之に反し技工的藝術品なるものは、材料そのものゝ生活を形成したものである。又描寫物といふものは、一の材料の中に於て描出をなす。然るに技工的藝術品に於ては、材料から或るものが作出される。尙此の事に關しては、吾人は曾て確立した技工的藝術と描寫藝術との間の根本的反對を想起するがよい。

而もかゝる反對は、決して何等の調合を許さない。言ひ換へると、技工的藝術と描寫藝術との間の中間は存立しない。此の故に、裝飾的描寫藝術品も亦、決して此のやうな中間物ではない。即ち之は、此の如き二個の原理上異なりたる世界の讓和したるものに外ならぬのである。

かゝる讓和は如何にして可能になるかといふに、本來、美的觀照に對して、技工的藝術品といふ活躍せる有機體を構成せしむる所の材料の生活なるものは、一の理念的のものであり、物質的現實の中に感じ込まれたものであるからである。そこで、かゝる理念的の生活に對し、裝飾的なる描寫に於ては、描寫藝術家が、その材料を形成する事により、材料に對して移植する所の均しく理念的なる生活といふものが、對應するのである。勿論前種の

理念的の生活なるものは、異なりたる源泉を有する。即ち異なりたる源泉から發生する。されど兩者が、同様の方法に於て、生活並に感じ込まれた生活であるといふ事は、それ等をして、結合して相互に進透し得るに至らしむるのである。

吾人は前により精密に言明した。描寫物中に描出されたものは、それ自身の中に完結せる一の理念的の世界であり、之は美的隔離性といふものを有すると。さうして此の際、全然而も各の意義に於て此の如くあるならば、然る時には、その描寫物は、純粹なる描寫物である。併し裝飾的藝術品に於ては、此の如くそれ自身の中に完結せる理念的の世界に對し、他の理念的の世界といふものが加入し、さうして之に對立する。此の如き他の理念的の世界とは、技工的藝術品の中に存在し、随つて究極する所、その材料に固有なる生活といふ理念的の世界である。かくて今や、一方に於ては、それ自身の中に完結せる世界、即ちそれ自身として考察されて、それがあつた所の完結的のものに立止まるといふ事が起り、而も他方に於ては、かゝる世界が、同時に、かのより一般的なる理念的の世界的範圍中に加入し、その基礎の上に立ち、それに於て反響を發見し、それと統一化をなすといふ事が起るに至るのである。

此の事をば、吾人は描寫藝術を詩歌に比較する事により、明瞭にするを得る。之を例へていふと、戯曲の中に於ては、一の人物、即ちその人物の生活といふものが描出されてある。併しながら戯曲なるものは、吾人には特定の韻律に於て對接し來り、さうして斯かる韻律中に於ても、特異なる生活といふものは存在する。此の際、一方に於ては、描出された生活、即ち描出された人物の生活、他方に於ては、韻律の生活といふものは、先第一に

全然異なりたる世界に屬する。さうして既に吾人が高調したる如く、人物なるものは、此の如き韻律に於て談話するものとして描出されて居ない。それは、韻律なるものは、詩人がよりて以て描出をなす所の言語、即ち材料に附屬するものである。換言すれば、詩人が作爲する所のものであるからである。併し又、韻律の一般的生活中には、被描出人物の生活、その感情、意志及び行爲等が投入せられ、かくて斯かる範圍中に於て發展し、その一般的生活を基礎となし、此の中に於て一般の雰圍氣や特異なる反響を發見しようとするのである。而も此の如き事は、全然自然的に仕遂げられる。何となれば、藝術的に描出された生活なるものは、正しくそれが藝術的に描出せらるゝ事により、一の特異にして、現實界に對し異他無縁なる世界、即ちそれに超越する所の世界に屬し居るからである。

吾人は今此の事を尙一層精密に叙説して見よう。彼れが如き世界なるものは、美的客觀性を有する所の世界である。併し又、之は藝術家によつて作造されたものである。さうして吾人が享樂をなす所の各の瞬間に於て、之は吾人によつても作造される。否その實をいふと、吾人は吾人が藝術品を享樂しつゝある間は、その藝術家と一つになつて居る。即ち吾人自らが藝術家となる、此の如きが故に「藝術家が藝術品を作造する」と云はうと、將た「吾人が藝術品を作造する」と云はうと、同一の言明となる。かくて戲曲的藝術品の世界なるものは、吾人に對立し、さうして吾人により受納されたものである。而もそれにも拘はらず、他方に於ては、その内部の本質上吾人自らである。即ち吾人により、且つ吾人自らによつて形成せられ、さうして吾人を超越する所の世界に轉置されたものである。而もかゝる世界とは、正しく藝術品の世界たるのである。

して又、事實關係が此の如くあるが故に、吾人、即ち此の現實的世界に迄纏綿された自我でなく、之に反し彼れが如き形成をなす所の自我に屬する所のものが、吾人によつて形成された世界の中に取入れられ得るのである。して又、此の如き形成作用にして、若しも一の韻律的形成作用であるならば、然る場合には、韻律中に存する所の生活、その中に存する所の、精神的興奮の波動といふものは、吾人が、描出された世界中に取入れ、かゝる世界の生活を適入せしむるものとなるのである。

之と同様の事は、描寫藝術品に關しても成立する。描寫藝術品とても亦、藝術家によつて作造されたものである。之と同様に於て描出された生活なるものは、彼れによつて形成されたものである。更に、若しも吾人が之を享樂するならば、之は又、吾人によつて形成される。併し吾人は、描寫藝術品をば、一の技工的藝術品、或は建築的藝術品の全體中に於て目視する事により、同時にその技工的な生活、或は建築的生活の韻律によつても充實される。さうして今や吾人は、建築的生活の鼓動をば、吾人によつて形成されたる描寫藝術品の生活中に取入れる。且又、此の如くして、吾人が依りて以て描寫品の生活をば、吾人の中から形成する所の範圍、或は吾人がその生活を形成しながら轉置する所の範圍中に於て、其の生活が、かのやうな鼓動に適入するといふ事實が發生するやうになる。

由來詩人なるものは、描出された世界を見る。さうして吾人は、詩人の作る通りにその世界を摸倣する事により、それをば、「一の氣質即ちテンペラメントを透して」見る。そこで之と同様に吾人は又、裝飾的描寫品の生活をば、一の氣質を透して見る。而も彼の詩歌に於ては、かゝる氣質は、よしや全然でなくとも、一部分、言語的

韻律の生活中に於て凝縮されてあり、此の裝飾的描寫品に於ては、建築的韻律の生活中に於て凝縮されてあるのである。

されど描寫品の生活が、建築的韻律の區域中に適入し、その基礎の上に構成せられ、又はその影響を以て影響せらるゝ事により、その本質に於て變化をされる。之は今や、正しく技工的生活又は建築的生活によつて進透される。之はそれをば、一の根本容状として、己れの中に受納する。

併しながら他方に於ては、描寫品中に於て感官化された生活なるものは、正しくそれが實際ある所のもの以外のものである事は能きぬ。即ち吾人は、之を作造したり、若くは吾人の美的觀照に於て之を形成したりする事は能きる。けれども又、之は徹頭徹尾吾人に與へられたものである。そこで若しも吾人にして、建築的生活を以てその生活に迄進透せしめようと欲するならば、それは既に、それによつて進透されたものとして吾人に對立現出せねばならぬ。即ちそれが吾人に對立現出するが如くに、かの生活によつて進透されてあらねばならぬのである。

此の事は、之を一般的に言明すると、次の事を意味する。裝飾的藝術品なるものは、それ自身に於ては、どうしても純然たる描寫藝術品とは異なりたる或るものである。之は必然的に、技工的生活並に建築的生活の根本容状によつて進透されたものたるのである。

併しかゝる生活といふものは、建築的の生活である。或は之を一般的に言明すると、物體的生活、即ち感官的生活であり、その韻律といふものは、此の如きもの、韻律である。此の故に、裝飾的描寫品なるものは、必然的に、物體的即ち感官的のもの、範圍中に、投入される。之はそれが裝飾的である程度、即ち建築的全體の部分である。さうして之に迄附屬するものとして顯現する程度に於て、此の如くある。同時に又、かゝる生活は、一より普遍的若くはより抽象的のものである。本來描寫藝術なるものは、それが個體の内部に迄進入する程度に於て、それに最も固有なるものを仕逐ける。之に反し裝飾的描寫藝術なるものは、その中に於て描出されたものを、個體並に内部的のもの、範圍から取去り、さうして之をば、一の普遍なる物體的存在及び生活、或は存在感情及び生活感情の範圍中に送り込むのである。

二 裝飾的彫塑への移行

今茲に裝飾的描寫藝術をより詳密に考察しようとするに當つては、吾人は、此の藝術の二重の性質に應當して、二重の研究的進行法を取る事が能きる。その第一は、繼續的進行法とも稱すべきものであつて、吾人は先第一に、吾人が前章に於て取つた所の方向に於て立止まる事が能きる。即ち吾人は、その際取つた所の進行法を繼續する事が能きる。更に換言すると、吾人は、前章に於て進んで裝飾的修装に迄到達した所の技工的藝術品、特に建築的藝術品の裝飾といふものが如何にして描寫藝術品に基く裝飾に迄前進高上せらるゝかを検討し得るのである。吾人にして二たび前章に於て、再生をなす所の修装、即ち裝飾的要素といふものに就いて語つたといふ事を想起するならば、かゝる進行法は、更に二重的に正當化される。試みに例へていふと、他の技工的範圍から取材された修装に就いて思念して見たらよい。此の如き修装をば、吾人は、判然、既に描寫修装と稱した。そこで若しも

吾人にして、此の種の進行法を取つて單に前進をなすならば、吾人は、統一的にしてそれ自身の中に完結せる生活連絡をば、再生によつて描出をするといふ、裝飾的描寫に迄自然に誘入せらるゝのである。

次に第二の獨立的研究法とも稱すべきものに就いていふと、裝飾的描寫藝術なるものは、上述したるものものに據ると、一種特異なる性狀のものであつて、爲に吾人は、之をば、かの表面裝飾の種類から獨立的に考察すべく多くの理由を有するのである。吾人は既に理解せる如くに、裝飾的藝術なるものは、一方に於ては描寫藝術、他方に於ては裝飾の計圖といふものとの間の特異なる讓和がある。之は一方の描寫藝術としては、それ自身の中に完結せる一の生活連絡を與へようとする。然るに他方に於て、之は又、それが與へる所のものをば、更に一より大なる技工的生活連絡の中に適入せしむる。さうして其の此の如くあるといふ事は、その獨立的研究を必要となすに至らしむるのである。

尙その外に、裝飾的描寫藝術なるものは、よしや廣い範圍を有するとはいへ、それかというて尙、全然たる平面藝術たるのではない。之は又裝飾的彫塑であり、裝飾的浮彫及び裝飾的圓形彫塑となる。此の如くあるが故に、裝飾的描寫藝術なるものは、既に上に語つた所の平面裝飾といふ概念の下に全然入る事は能きないのである。

若しも吾人にして、先第一に、讓和をなすべくある所の兩者をば、相互に對立せしめ、次に兩者を益々密接なる相互關係に於て現出せしめ、さうして最後に讓和が如何に必然的に形成せらるゝかを檢視するならば、吾人は彼れが如き讓和といふものを最も容易に理解する事が能きる。一體讓和なるものは、いつでも、それをなすべくある所の兩者の性質によつて制約される。さうして此の際吾人は、より便宜なる方法を取り、裝飾的彫塑から出發

して見よう。その此の如くするのは、三個の理由からである。第一には、吾人は既に前に、彫塑をば平面藝術に先行せしめたからである。第二には、彫塑といふものゝ中に於て、かのやうな讓和の段階的進行といふものが、最も簡單に追隨し得らるゝからである。さうして第三には、彫塑なるものは、始めから、繪畫よりも、裝飾的描寫藝術に對し、より近き位置を占むるからである。實に彫塑の特殊なる範圍といふものは、美なる感官的顯現、即ち身體的生活並に生活感情といふそれである。之は此の故に、その本性上、裝飾的藝術に類似して居る。之と一致する事實といふものは、少くとも、より大なる彫塑的描寫品は、自然に、一の建築的連絡中のどこかに於てその確固たる位置を占有し、さうして斯くなると共に、全然己れ自らから、若くはその性質上、一の此の如き連絡中に内屬せんと要求するといふ事である。併し又、それが此の如き要求を提出するに就いては、此の要求を正當化せねばならぬ。さうして斯かる正當化をば、それが内部的に建築的藝術品に迄附屬する事、簡言すれば裝飾的のものとなる事によつてのみ、仕遂ぐるのである。

三 裝飾的彫塑の階段

前項に於ては、既に裝飾的描寫藝術の裝飾的性質の種々の段階といふものが説示された。而もかゝる段階とは是、描寫物が、技工的連絡の中へ適入する段階といふものと同意義である。併し又描寫品なるものは、かゝる連絡の中に、より多く密接又はより少く密接に適入し得る。若しもそれが、その中により多く密接に適入し、或はより多く外形的にそれに附屬するやうになるならば、益々多く、それは、内部的にかの連絡に附屬する事を要求

する。即ち之と合體して、唯一の生活連絡の一體を構成すべく要求するのである。

併しかゝる際に於ては、技工的藝術品の連絡といふものは、より廣大なる連絡である。そこで、かのやうな適入といふ語は言明する、描寫品が、かゝる連絡の一部分となり、さうして此の逆は成立しないといふ事を。されど此のやうな一部分にして、一の全體の中より密接に適入すればする程、益々多くそれは、該全體並にその合法性に従屬する。随つて又、裝飾的描寫藝術の場合に於ても、適入がより密接であればある程、益々多く、建築的生活連絡なるものは、描寫品中に描出された生活に對しての統配的の根本調子となるのである。

吾人は、技工的藝術品と描寫品とが結合して、一の生活連絡を構成する顛末に對し、技工的藝術品と、現實なる有生、無生の事物との同種結合、即ち此の如き事物を以てするその「裝飾」といふものを先行せしめ、かゝる裝飾を先に取上げる事にする。尙此の事に就いては後に再び説かう。吾人は之に關しては、例へていふと、街路で行はるゝ祝祭の時に、窓側の座の上に附せられ、外に迄懸る所の絨氈とか、家の外壁を裝飾する所の花環とか、門前の左右に置かれてある所の裝飾樹木などを思念する。

而も此等の事物が裝飾をなすといふ事は、茲では言明するのである。事物自身の中に表現されてある所の生活が、其の適入されてある所の建築的連絡と合して、一の統一體を構成し、かくて建築的生活の一片となる。簡言すれば建築化をされると。

されと他方に於ては、かゝる事物は單に附加されてある。随つてそれ自身の中に完結せる一の事物として存立する。之は、未だ建築的全體の集塊中に受納されても居なければ、又その全體の空間的存在上、それと統一化も

されて居ない。さうして其の此の如くあるといふ事は、それが、其の内部的本質上、美的觀照に對して獨立的事物となり、随つて己れ自らの合法性に従つて發展し得るに至らしむる。そこで、右の絨氈なるものは、正しく普通の絨氈が懸ると同様に懸り居り、樹木は、他の樹木が生長し居ると同様に生長して居る。されど同時に、此等は、此の事をば、一の建築的生活の基礎の上に仕遂げる。此等のものの中には、實にその本質を影響し、それを統配し居るやうに見ゆる所の、建築的生活の一般的根本容狀といふものが存在するのである。

此の如き方法に於て、人間の形體といふものは裝飾的になり得る。かの王侯の住居の入口の左右に居る衛兵、貴紳の通行に際して配置せらるゝ所の儀仗等は、是裝飾的人間である。吾人は之を裝飾的に生活する所の形像と稱する事が能きる。

一の建築的全體に迄唯外部的に適入されたる無生物、即ちかのやうな絨氈、花環、樹木等に關しては、吾人は言明した、此等は、其の附屬し居る所の全體中に進透する建築的生活といふ一般的範圍内に於ても、尙獨立的本體として顯現すると。かゝる獨立性を此等有するのは、それが常に除去され得べき裝飾として表現するからである。此等は、或る意義に於ては、唯偶然的にそこにあり、さうして他の所にはあらぬ。その中でも、「裝飾的」人間なるものは、それが裝飾として現出する所の場所に迄、永久に結合されてあらぬ。更に又、此の如き理由よりして、有生若くは無生の事物は、甚だ自由に、それ自らの本質を活動せしめたり、或はその自然的なる自己の合法性を自由に發展せしめたりするのである。

之に反し、一の建築的全體中に適入されてある所の彫塑的描寫品なるものは、始めから建築的全體と、より密

接なる方法に於て統一化されてある。此の際に於ては、吾人は、描寫品をば、先第一に、唯建築的連絡中に投入されたるもの、例へば圓柱の間に投入されたり、又は方柱の前に置かれたるものと思念する。吾人は未だ之をば、何等かの集塊統一體によつて此等と結合されたものと思念しない。かゝる場合には、之は、何等かの臺又は基脚の上に立ち、さうして先第一に之に結合されてある。されど此の種の臺又は基脚といふものは、それ自身に於て、一の建築的形體であり、さうして直接に建築的全體の部分として顯現する。して又、此の如くあると共に、此の上に立つ描寫品も亦、此の如きものとなるのである。

さうして此の如き状態からして、吾人は、思想に於て、建築的全體と彫塑的描寫品との外部的統一化、即ち空間的の統一化をば、益々密接なるものに變じ行く事が能きる。されどかゝる統一化が、一のより密接のものとなる程度に應じて、彫塑的形體といふものは、その内部の本質に於て、益々多く建築的全體と統一化をせられ、さうして此の如くなると共に、己れ自らも、益々多く建築的のものとなる。今やかの一般的なる建築的根柢となるものは、一步／＼より少く一般的のものとなる。建築的根柢調子といふものは、益々高く響く所の根柢調音、更に進んでは統一的の音となり、最後には、彫塑的形體といふものをして、全然一の建築的部分に迄變せしむる。例へていふと、彫像が一の柱と變ずるが如きである。よしや又、かゝる柱たるや、純粹なる柱に對しては、恰も詩歌的説話が、純粹なる可解的説話に對するが如き關係を有するとはいへ、尙然るのである。

此の種の過程は、之を恒常的のものと思念する事が能きる。併し此の如くあるとはいへ、彫塑的描寫藝術と技的藝術との間の原理上の反對、隨つて又、純粹なる彫塑的描寫藝術と裝飾的彫塑との間の原理上の反對といふものは、消滅するに至らない。即ち描寫藝術品と建築的部分の裝飾形といふものが、よしや如何に近接して現出するとはいへ、上に述べたる反對性は、儼然存立するのである。その反對性とは、右の後者、即ち裝飾形の活躍性といふものは、その源泉上即ちその生活が依りて以て形成せらるる「材料」上からすれば、その藝術品を成立せしむる所の材料の生活である。然るに、前者即ち描寫藝術品の生活なるものは、それに異他無縁なる材料に迄移植された生活であるといふ事である。併し吾人は、之に關しては、何等の中間物を有しない。之に反し單に、「甲若くは乙」「一部分と他の部分」「一方と他方」簡言すれば、前既に述べた所の讓和といふものが存する許りなのである。

此の際、若しも吾人にして、先第一に、一の彫塑的描寫品、或は之をより精密にいふと、圓形彫塑品が、建築即ち建築的部分に迄、上述したる如き方法に於て、唯外部的に結合されたと思念するならば、然る場合には、その彫塑品は、上述したる理に基き、既に建築的全體の一部として、その全體に迄附屬する事になる。此の故に、かゝる彫塑品に於ては、建築的生活の一の根本容狀といふものが存在する。之は既に、或る程度に於て建築化されてある。さうして此の事は、それが、特定の場所に於て、建築的生活の方向及び韻律を己れの中に於て表現するといふ事を言明する。又之と同時に、建築的生活は感官化される。即ち感官的生活、或は感官的顯現の意義といふものが高調せられ、さうして根本調子と爲される。されど他方に於ては、描寫品とても、かゝる一般的範圍の内に於て、一の描寫物として發展すべき最高の自由を有する。換言すれば、描寫品中に於て描出されてあるが如き形像の特異なる生活を獨立的に形成すべき最高の自由を有するのである。

併し此の際、尙一の重要な動力、即ち材料といふ動力が、特に顧慮さるべくある。若しも裝飾的の描寫品にして、裝飾さるべくあるものと異なりたる材料を以て作成せらるゝならば、描寫品が青銅製であり、さうして裝飾さるべきものが、石材建築、又は石材建築的藝術品の一部であるとするならば、兩者は、全然相互に對峙する獨立のものとなる。して又、描寫品が、全然任意の裝飾ではなく、之に反し一個の獨立の描寫品として現出するといふ事は、描寫品の本質の甚だ重要な點である。さうして此の事は更に、建築物の中へ、描寫品の空間的、適入の方法に對して影響を及ぼすやうになる。言ひ換へると、之は己れの方に於て又、被裝飾物に對してのより散漫なる空間的結合を要求するのである。

されど他方に於て、描寫品が、建築物と結合されてある限りは、又之が事實である程度に於て、それは同時に建築的藝術品の部分となり居る。その生活といふものは、建築的生活の一部である。此の如きが故に、描寫品なるものは、或る方法に於て、建築的藝術品の部分が言明する所のものを言明する。その異なる所は唯、それが正しく、己れ自らの方法、並に特殊の自由を以て、かゝる建築的生活を形成するといふ事だけである。して又、吾人が茲に假定するが如き結合なるものは、よしや唯散漫なる外部的附加であるにもせよ、尙吾人は既に裝飾の印象を有する。詳しくいふと、吾人が、外部的附加の爲に、被裝飾物をば、一個のものとして受納する事により、吾人は必然的に、或る程度に於ては、裝飾形の固有の生活をば、「その基本形」の生活の中に、恰も一般の裝飾物の中に取り入れらるゝが如き方法に於て、取入れるのである。

裝飾的描寫品の裝飾的性質の此の如き段階に對する一の實例を得ん爲めには、吾人は、例へていふと、石造の玄關の左右に立つ所の青銅製騎士の彫像を思念して見たらよい。此の如き彫像は、青銅を以て作成されてある。而も之は、敢へて石造の玄關の爲ではなく、隨つてその裝飾の爲ではなく、之に反し彫像中に描出さるべくある所のものゝ描出の爲に此の如くある。之は一個の獨立の藝術品である。同時に又、一の特異なる種類に屬する所の藝術品である。之は彫塑藝術品であり、さうして殊にその特異なる本質を有する所の青銅彫塑である。併し又、かゝる彫塑藝術品は、同時に一の一般的建築的運動法及び運動方向を表現し、さうして之の限りに於ては、又裝飾的效果を及ぼしつゝある。

かゝる彫像が、その材料の爲に有する所の獨立性に對しては、空間的の獨立性といふものが必然的關係に立つ。詳しくいふと、彫像が一の獨立の彫像であるといふ事は、玄關の前に於ける自由なる直立によつて直接的に承認を促さねばならぬ。かゝる彫像は、決して、それが實際欲しない所のものを欲するかの如き外觀を起さずめてはならぬ。換言すれば、建築的全體の集塊部分の如く想はしめてはならぬのである。

此の反對に、若しも裝飾物、特に裝飾的の彫塑描寫品にして、裝飾物の材料を以て形成せられ、かくて例へば、大理石方柱の前に大理石の彫像が裝飾的に安置せらるゝならば、建築物と被裝飾物との外部的統一化、隨つて又内部的統一化といふものも、一段の歩を進むるに至るのである。

されど此の外に、吾人は尙一の假定を提出する事が能きる。曰く、彫像と建築的藝術品との間でなく、之に反し、一方に於ては、彫像の基礎、即ち柱脚、臺、他方に於ては建築的藝術品との間に、可觀的なる集塊上の連絡が存すると。此の如き場合には、描寫藝術品といふものはより高度に、建築的生活の法則の上に立ち、さうして

同時に、その本質に於て、建築的生活に接近するやうになる。

更に、若しも吾人にして、一の大理石彫像が、大理石製のもの、中に、かういふ風、即ち該彫像中に描出された運動が、直接に、建築的運動によつて充たされた空間中に於て實行せらるゝといふ風に、投入されてあると假定するならば、統一化のもう一步進んだる段階といふものは發生するに至るのである。

次に、若しも吾人にして、例へば階桁ステップの表面上に於て、それと同一の材料を用ひて形成された獅子を見るならば、統一化といふものは、他の方向に於て進むやうになる。此の場合には、獅子は階桁に附屬し、さうしてその一部分となる。それかというて尙、之は階桁の上に作造されて、自由且つ總ての方面に於て獨立的に存立する、今や階桁なるものは、かの彫像に迄附屬する臺となる。而もかゝる臺は、是建築物の完成的部分たるのである。

して又、此の如く益々深く進行する所の統一化からして如何なる結果が發生するかは、既に述べた所である。即ち描出された生活にして建築的生活の連絡中に、より密接に附屬し入るに隨ひ、その生活といふものは、益々多く、建築的生活を分享し、それを共同的に帶有するに至る。さうして又、かくなるといふと、彫像中に於て具體化された運動といふものは、必然的に、益々多く建築化される。隨つてそれは、感官的物體的になり、同時に又、抽象、普遍、範型的といふ性質を取得するに至る。

さうして之は、次のやうな事を意味する。それは、今や彫像に於ては、個體の内界生活の特殊的發表でなく、寧ろ一般的の身體生活、並にその生活中の建築的生活に迄直接に類似してある所のもの、即ち一般的の態度、位置、運動等が目的とされるといふ事、又かゝる一般的のものが、建築的生活の性質及び韻律中に適入し、且つ之

と一致調和するに至るといふ事である。

更に吾人にして、一の凸出する所の梁が、一の方柱によつて可觀的に支撐せられ、それかというて方柱の前には、敢へて獨立的にしてそれ自身の中に完結せる彫像ではなく、之に反し柱壁並に凸出せる梁と集塊統一性によつて結合されたる彫塑的彫像が立つと假定するならば、統一化の一層進みたる段階といふものが發生する。併し此の如き一層進みたる段階とは、かの壁龕中に於ける彫像に比較した上の事ではなく、之に反し、前に曾て述べた所の、玄關前に立ち、さうして建築物の材料を以て形成せられ、且つ上述の方法に於て、それと集塊統一性を有して立つ所の彫像に比較した上の事である。

此の際吾人は、彫塑的彫像が、先第一に共同的の支撐及び支持をなすと思念しない。之に反し、唯方柱が可觀的に支撐或は支持をなすと假定する。併し彫像といふものは、方柱に迄、集塊連絡によつて結合されてある。此の如くある事により、此の彫像は、常に方柱に於ける運動を分享する。その運動は方柱の運動である。けれども、建築的勞作及び作業の眞面目なる言語からして、遊戯の言語に迄翻譯された運動である。之は、方柱の運動を軟化するものたるのである。

されど此の如くなるといふと、同時に、吾人は、統一化の尙一層進みたる顯著なる段階に到達するのである。吾人は彫像をば更に、支撐及び支持をなす所の集塊中に於て現出せしめ、その支撐及び支持を分享せしめ、かくて支持をなす所の同一の集塊をば、一方に於ては方柱、他方に於ては支持をなす彫像として形成する事により、右の到達を仕遂ぐる。

但し右の如く述ぶるといふと、吾人は容易く理解し得らるゝ如く、眞に適當して居ない所の言辭を使用する事になる。その實をいふと、「形像」といふものが、方柱の支撐及び支持作用を分享するのではない。之に反しそこに自ら支持をなす所のは、石の集塊に外ならない。さうしてかゝる集塊の一部分が、人間のやうに形成されてあるのである。

而も此の如くなるといふと、吾人は、美的觀照の一の新見地に立ち、かくて新奇なる藝術的範圍中に入る事になる。今や支持をなす所の集塊といふものが、一方に於ては純粹なる建築的形、即ち方柱として形成せられ、さうして之と同一の集塊が、他方に於ては、若くは他の部分に於ては、人間の形像を有する事になる。尙之を詳しくいふと、唯一の全體、即ち不分割なる集塊が支持をなす。併しながら之は、一方の方柱といふものに於ては、單に建築的に支持をする。換言すると、一の重壓に反對しての抽象的の直立を表現する。さうして此の如き抽象的の支持といふものは、之で以て満足せしめられる。即ち大理石の集塊の建築的任務といふものは、蓋し之によつて果たされるであらう。併し又、かゝる抽象的の支持は、同時に、石といふ集塊には異他無縁なる所の人間の形によつて具體的に圖解される。けだし彼れが如き抽象的の支持は、未だ全然人間の支持の形となされて居ない。之に反し、人間の支持といふものが、右の如く圖解をしながら、此の抽象的の支持と並列しつゝあるのである。

又之と共に言明せらるゝのは、彫塑的の形といふものは、此の場合にも、相當の程度に己れ自らの自由を有するといふ事である。けだし、大理石を以て形成された人間の形像といふものは、それが、彼れが如き建築的空間に迄適合し、その基本形によりてかゝる建築的空間をば、建築的有意義に充たし、さうして重壓に反對しての有力

なる直立及び向注の一般的概念を表出する限りに於ては、是人間の自由に運動する事が能きるからである。之は、それ自身に於ては、未だ純然たる支撐及び支持ではない。此のやうな支撐及び支持は、先第一に、方柱によつて表出される。之に反し之は、一の人間の行動を表現する。されど、此の行動は、その根本容狀として、有力なる直立的並に建築的空間中への支持的適合といふものを帶有するといふものである。

最後に、右の如きものよりして、統一化の最終の段階たる所のものが、それ自身に現出するやうになる。それは即ち次の如きものである。支持をなす所の人間の形像及び方柱又は圓柱は、それが唯一の集塊の部分となりたる後に、始めて唯一の集塊となる。即ち方柱なるものが、全體に於て人間の構成を取得するやうになる。そこで今や女像柱といふものが、もはや一の彫塑的形像としてではなく、之に反し建築的部分として發生する。吾人は一の人間の形像を見る。併し又、此の形像は、十分なる建築的嚴肅を有する。之が行爲は、人間の支持の必然的容狀を有する所の建築的、支持である。前に語りたる場合に於て、石といふ集塊の種々の部分に分配されており、さうして之の限りに於ては一の空間的に分割されてある所のもは、今の場合に於ては、全然空間的に一つとなる。即ち相互に交渉するやうになる。さうして茲に及んで、十分なる融合作用といふものが起るのである。

之と比較をなし、且つ前に語りたる場合、並にそれに前行せる所のより少なき統一化といふ段階を回顧する事により、吾人は次の如く特徴づける事が能きる。女像柱に於て絶對的に一である所のもの、即ち抽象的の建築的支持と、人間又は一般的生類の形とは、右の前行せる所の場合に於ては、段階的に、而も内部的統一を全然失ふ事なしに、益々進みたる分離をなす。さうして此の如くあるよりして、再生的形像の構成の自由といふものに於

ける相對應する所の段階が発生する。かゝる自由の段階とは、是、取りも直さず、建築的形の普遍性及び抽象性、並に感官性から漸次獨立するに至る所の段階たるのである。

第三章 裝飾的平面描寫藝術

一 裝飾的平面描寫藝術に關する總說

前章に於ては、吾人は特に裝飾的の彫塑描寫藝術に就いて語つて居つた。さうして少くとも其の出發點からすると、裝飾的圓形彫塑に就いて語つて居つた。されど斯かる藝術には、裝飾的の平面描寫藝術といふものが對立する。さうして又、兩者の中間に、裝飾的浮彫描寫、或は繪畫的浮彫なるものが位するのである。

此の裝飾的浮彫描寫に關しては、吾人は既に一般の浮彫藝術を攻究する際に説明をなした。此の場合には、吾人は裝飾的浮彫描寫をば、浮彫修装即ち修裝的浮彫と顯然たる反對に立たしめた。尙その外に、裝飾的浮彫描寫の特性といふものは、一方に於ては、裝飾的平面描寫の特性の考察、他方に於ては、裝飾的彫塑に關して前章に言明した所のものから、理解され得る。或は又之は、裝飾的平面描寫の特性を考察し、その際同時に、浮彫藝術をして、純粹なる平面藝術と區別せしめ、之をして彫塑的藝術の一の特異なる種類となるに至らしむる所の動力といふものを考慮するならば、明瞭になるのである。此の事に關しても、吾人は右の場合に於て既に述べ置いた。さうして斯ういふ譯であるから、もはや裝飾的浮彫描寫に關し今特別に之を考察する必要はない。吾人は尙一

度想起すればよい。それは、浮彫描寫に關しては、大なる型の圓形彫塑に關し曾て言明した所のものが、特に適用されるといふ事である。吾人は信するのであるが、圓形彫塑なるものは、その性質上、いつでも或る程度に於ては裝飾的のものである。けれども浮彫描寫といふものは、常に顯著なる方法に於て此の如くあるのである。

之に反し、若しも吾人にして「描寫」といふ語をば、より狹義に解釋するならば、裝飾的平面描寫、即ち裝飾的描寫なるものは、特殊の考察を要するのである。

本來描寫といふ事は、摸寫するといふ事である。即ち思念された一の生活連絡をば、それと異他無縁なる材料の上に再生描出するといふ事である。かゝる描寫作用といふものには、裝飾作用なるものは、先第一に正反對に立つ。即ち吾人が描寫作用を遂行する爲には、吾人は全然被描寫物の中に觀照しながら没頭し、感官的に知覺し得べき藝術品が吾人に感官化する所の、それ自身の中に完結せる理念的世界の中に沈潜する。之に反し裝飾作用を遂行する爲には、吾人は、藝術品をば、それ自身として觀照し、さうして之をして吾人の上に働かしめない。此の反對に、之をば、外圍の物的現實界、即ち技工的藝術品の世界の連絡の中に投入するのである。

吾人は之に對する實例として、裝飾的壁畫を取つて見よう。此の中にある形及色は、或るもの、例へば歴史的風景、又は神話的風景を描出する。さうして繪畫が、一の描寫である限りに於ては、形と色といふものは、かゝる「風景」の内部の本質を構成する所の現象、即ち生活連絡に對しての、それ自身に於て全然無關心なる象徴たるに外ならない。之に反し吾人にしてかゝる繪畫を裝飾的地から觀照するならば、之はかういふ事を意味する。吾人が、形及び色、並に此の中に存する所の生活をば、描出された空間でなくて、その繪畫が存在する所の

現實的空間を充たす所の形及び色と連絡に立たしめて觀照すると。随つて之をば、かの建築的の線と、建築的の形を興起せしめかくして建築的生活の印象を高上せしむるといふ色との連絡に立たしめて觀照するといふのである。

そこで容易く理解せらるゝ如く、此の二つの觀照法に於ては、繪畫の形及び色なるものは、觀照者に對し、いつでも原理上異なりたるものである。其の甲に於ては、此等は再生作用をなす。然るに乙に於ては、此等は再生をなさない。之に反し、他の均しく物的なる現實と合體して一の統一體に結合せらるゝ所の物的現實である。彼れに於ては、吾人は形及び色をば、その理念的方面から、即ち描出をなすものとして觀照する。之に反し、之に於ては、吾人は之をば、他の形及び色との現實なる空間的共存の方面、簡言すれば、その實質的存在に關して觀照するのである。

さうして如何にして此の如き二種の觀照法の統一體が可能であるかといふに、之に對する答は次の如くある。かゝる統一體は、その實をいふと、甲の觀照法の目的と乙の觀照法の目的とが、一つの統一的の目的の中に統括さるゝが故に可能であると。さうして之はかういふ事を意味するのである。吾人にして、描寫作用に吾人を打任すならば、然る時に吾人は、吾人が目視する所のものを透して、その中に描寫された生活に迄注目する。又他方に於て、若しも吾人にして、描寫をなす繪畫をば、その外圍の形及び色と思想上に於て連絡に立たしむるならば、然る場合に吾人は、彼の形及び色、此の形及び色が結合されてある所の全體、形的形及び全體、色的といふ統一體中に於て、それ等が、共通的に吾人に提出する所の生活、若くはそれ等によつて表現し特徴化された生活連絡といふものゝ上に注目するに至ると。

此の際吾人は、一の統一的の體驗を取得する事が能きる。吾人は次のやうな場合に於ては事實的に之を取得する。それは、描寫物が描寫物として吾人に與ふる所のもの、即ちその中に描出された生活といふものが、描寫物といふ語が常に言明するが如きその特性並に、それ自身の上に於けるその完結性を損害する事なしに、矛盾なく且つ自然的要素として、より廣大なる生活連絡中に適入する場合である。更に之を言ひ換へると、若しも描寫物中に描出された生活が、或る方法に於て、その描寫物が適入されてある所より廣大なる連絡の生活と同一である場合、即ちそれが異なりたる形の範圍に屬し、かくて例へば、線といふものゝ生活の範圍から、人間的行動の範圍中に移植せられ、さうして此の如き異なりたる範圍に適合するやうに、形成し、個體化し、それ自身の中に完結せらるゝが如き時である。或は又、全體の生活連絡中に於て、一の生活の同一の根本容狀、根本韻律が、異なりたる方法、即ち一方に於ては建築的に、他方に於ては人間的生活の方法に於て、分化形成されて、吾人に提示せらるゝ場合である。此等の場合に於ては、一つの生活連絡の二つの方面、即ち描寫物を圍繞する所の形及び色の中に存在する所の生活と、描寫物中に描出された生活といふものとは、相互に、かの異なりたる仕方といふものが、同一のものを言明するといふが如き、相互關係に立つ。特に抽象が具體、普遍が個體に對するが如き關係、簡言すれば基本形と裝飾形、事實的說話と「譬喩」とが、相互に立つが如き關係をなす。更に他の實例を假り來るならば、一の旋律の根柢に存する所の基礎とその旋律、敘情詩の韻律並にかゝる韻律中に存する所の生活、即ちその中に存する所の内部的生活の一般的波動が、その詩の語を以て發表されてある所の、内容的に確定され

た精神的現象の連絡に對するが如き關係に立つ。終りにもう一つの實例を假るならば、日常生活に於て、一の一般的氣分が、その氣分から發生したり、又はその氣分に自然的に適入したりする所の個々の體験に對するが如き關係をなすのである。

されど此の如き方法に於て、描寫作用と裝飾作用とが、唯一の體験に迄結合さるゝ爲には先第一に、一の内部的假定といふものが存在せねばならぬ。詳言すれば、その描寫物が特定の内部的本質を有せねばならぬ。而も此の事は、特に次のやうな事を言明する。描寫物の形及び色といふものは、全然描出の手段であるべく要求してはならぬ。之に反し、その中に描出された生活なるものは、自發的に、換言すると、それ自らの性質上、外圍が具體化する所の、生活の一般的性質及び韻律に従屬をせねばならぬ。更に他方に於ては、外圍のより普遍なるもの、即ち今の場合に於ては、建築的生活なるものが、それ自身に於て、描寫物中に於て此の生活に附與せらるゝが如き各個の形成法及び圖解に迄、自發的に、さうしてそれ自らの本質と矛盾する事なしに、己れを提供するが如き種類のものでなければならぬと。

次に、彼れが如き統一化の外部的假定といふものは、吾人をして、描寫物の形及び色をば、建築的外圍と思想上に於て必然的に連絡せしむるが如く、然く兩者の直接なる空間的連絡をなさしむるといふ事である。

二 裝飾的描寫の二重の活動法則、それに對する實例

凡て描寫物をば、その外圍の建築的生活、隨つてより一般的又はより抽象的なる生活連絡の中に適入せしむる

といふ事は、二重のものを包含するのである。今かゝる二重のものをば、一の新しい實例により區別して見よう。之を例へていふと、吾人にして、「ゴチック」殿堂に於ける繪畫ある窓を思念すると假定する。第一に、かゝる窓なるものは、偶然的に建築物の中に投入されて居ない。之に、反し之は斯かる建築物に迄内屬する。さうして此の事は言明するのである、それが、その外の建築部分と合して一の活躍せる全體を構成するといふ事、隨つて、「ゴチック」建築の固有の韻律といふものが、その中に響き込み、窓なるものが、かゝる範圍の生活を共同的に帶有するといふ事を。

併しながら之と共に、第二の事が直に結合される。抑も窓なるものは「グラス」から構成されてある。さうして此の如き構成とても亦、偶然的のものではない。之に反し、此の如くさるゝ事の中に、窓といふものゝ本質の根本容狀が存立する。即ち之は「グラス」窓として、「グラス」の繪畫が適入されてある所の建築的連絡に迄同時に内屬する。今や窓なるものは、建築物の一部となり、さうして之は「グラス」窓としては、光線といふものを、その内室中に進入せしむべくある。更に、若しも「グラス」にして色彩を有するならば、その事は「グラス」により有色の光線がかゝる内室中に進入し、さうして建築的全體をば、有色なる光線の氣分を以て充たすといふ事を意味するに至るのである。

そこで此の如くある事により、「グラス」窓に描く繪畫に對する不可動なる前提といふものが與へられる。言ひ換へると「グラス」繪畫の色及び形を以て遂行さるべき所の描出に對する不可動の前提なるものが發生するのである。かゝる前提とは、苟も之に關して「活動」をなさうと欲する所のものが、銘記せねばならぬ所の活動法則

たるのである。彼の建築的生活の韻律、如何に「ゴチック」建築に於てかゝる生活が鼓動するかの特異なる方法、その経過の仕方、如何に此の生活の要素が相互に交互影響を及ぼすかの種類等は、一の「活動法則」を構成する。また更に、描出材料の性質によつて制約されて恐らくは溫和にして而も混濁されない色といふものは、他の活動法則を構成する。兩者は基礎及び限界である。かゝる基礎の上には如何なるものが作成さるべくあるかを先第一に攻究しない所の描寫藝術なるものは、無基礎の不安定なる作成をなす。さうして建築的生活の統一、その性質及び韻律、並に「グラス」の色を破壊する所の描寫なるものは何等の藝術品ではない。よしやかゝる條件を否定する所の藝術品が、世に廣く散在し居るとはいへ、而も之により、此の斷言を變更するに至る事は能きないのである。

之と共に、同時に、明瞭になるのは、「グラス」繪畫なるものが、「グラス」の上に描く繪畫である以上は、それが如何なるものゝみを意圖し得るかといふ事である。それは即ち、色を殺す所の模造作用ではなく、之に反し、確固たる線に基く平面及び色の限制作用、並に透明なる色を以てする平面の彩色といふものが、その意圖する所のものである。更にそれは、光線と影とでなく、之に反し光線の圈内に於ける生活である。又色を死滅せしむる所の遠隔ではなくて、直接なる近隣である。若しも吾人にして、空氣、雰圍氣、光線及び影の描寫をば、特に繪畫的と稱するならば、然る時に吾人は、「益々非繪畫的になれば益々良好である」と此の場合に言明せねばならぬのである。

さうして吾人にして、「グラス」の色の特性を除き、何が外圍の建築的生活に迄最も自然的に適入するかを尋究

するならば、吾人は答へねばならぬ。それは即ち、人間の身體、詳言すれば、その一般の身體的存在、その感官的顯現、並にその顯現の美、その位置、態度、運動、簡言すると、その顯現の結構に於ける人間形像であると。之に反し、一方に於ては、内容上精神的なるもの、他方に於ては、空間の氣分即ち詩、その中でも、自然の風景に於ける氣分、詩なるものは、建築的生活に適入する事は困難である。更に此の如き見地からすると、光線と影との反對、暗黒、空氣及び雰圍氣といふものは、「グラス」繪畫中に取り、事は能きない。尙又、諸形像の最も自然的なる外圍は、空氣ではなくて、有色の「グラス」である。之が故に、かゝる形像は、それ自ら自然的外圍から取出され、さうして孤立的に「グラス」及び「グラス」の色、生活といふ媒介物の中に投入せらるゝのである。

さうして此等の形像が、それがある所のものゝ外に、尙他の或るものを「意味する」といふ事、即ちそれが譬喩的、歴史的、教育的又は「宗教的」意義を有するといふ事は、藝術品と少しも交渉する所がない。又之に對して何等の損得をも及ぼさない。されど吾人は言明せねばならぬ、彼れが如く譬喩的、歴史的又は宗教的であればある程、換言すれば現實と異他無縁にあつて、さうして益々多く範型的に表現をするならば、それは益々良好になると。

本來「グラス」窓の畫家なるものは、畫家ではない。之に反し建築家並に「グラス」藝術家である。此の故に彼れは、己れ自身から、純粹なる描寫藝術が爲し得る所のもの、並に、例へていふと、他の材料及び他の外圍が彼れに許容するものなどを描出しようとの各の意志を除去せねばならぬ。彼れは、畫家として、己れ自らを否認し、

さうして建築的生活並に「グラス」の生活によつて充たされた製作に従事せねばならぬ。實に彼れは、此の如き位置に於て畫く事により、同時に技、工的の藝術家となる。即ち畫家といふ職業の代りに、彼れは、より少く高尚ではなく、それかというて全然異りたる職業、即ち「グラス」窓を裝飾する所の藝術家といふ職業に入るのである。

此の事をば、古代の「グラス」藝術家は知得して居つた。されど古代以後になつては、此の事は忘却された。試みに「ケルン」の殿堂に於ける古代の「グラス」繪畫と、「ルードウィヒ」二世によつて作造された窓とを比較して見るがよい。彼れに於ては藝術が存するが、之に於ては誤解が存する。一に於ては十全なるものが成就されてあり、他に於ては、藝術家といふものが不十分なるものをも製作するといふ事を示す。甲に於ては建設せられ、乙に於ては破壊されてある。

裝飾的描寫の「二重活動法則」といふものは、上に既に區別された。之に對して吾人は尙特に注意を拂はねばならぬ。繰返す迄もなく、かゝる活動法則の一をば、描寫物の外圍が與へ他をばその描出材料が與へる。されど吾人は此の際、注意をば、特に此の第二の活動法則に拂うて見よう。此の法則といふものは、既に根柢に於て、第一法則の中に包括されてある。けだし一の「グラス」繪畫が建築的連絡中に投入されるとするならば、かゝる連絡中に投入さるゝ所のものは、先第一に描寫藝術品の材料、即ち今の場合に於ては、畫かれたる「グラス」窓である。かゝる窓は、物質的の物として彼れが如き物質的連絡中に投入される。さうして此の如くなつて始めて、或は此の如き物質的の物をばかの物質的にして今の場合に於ては建築的の連絡中に受納する事により始めて、描寫中に描出された生活といふものが、美的觀照に對し、かの如き物質的連絡中に存する所の生活の連絡中に於て現出するに至るのである。

かゝる言明事項は一般的に成立する。吾人にして、若しも何等かの描寫物をば、一の物質的連絡の一部として觀照し、さうして其の内容、即ちその中に描出された生活をば、その中に存する所の物質的連絡の見地の下に置くなれば、然る時には、吾人は正しく之と同時に、描寫物をば、それ自身に於て、此の如き物質的の物として觀照し、さうして其の中に描出された生活をば、かゝる物質的の物そのもの、の中に存する所の生活の見地の下に觀照するに至るのである。之を他語を以て表出すると、吾人が、一の裝飾描寫物を己れの連絡中に入れ居る所の建築的生活をば、かゝる描寫物中に描出された生活の中に取入るゝ事により、吾人は自然に、その生活を描出し居る所の物質的物の生活、即ち上の場合に於ては、「グラス」窓の生活、特に「グラス」及び「グラス」の色の生活をば、此の如き描出された生活の中に入取るゝのである。吾人は此のやうなる事をば、自明的必然性を以てなす。何となれば、此の如き物質的の物といふものは建築的全體の一部分として、それに迄内屬し、隨つて又、その生活といふものも、單に建築的全體の生活の一部に過ぎないからである。

而も此の如くあると共に、裝飾的描寫物、特にその材料に關する所の點は、純粹なる描寫物と全然たる反對に立つに至るのである。勿論かゝる純粹なる描寫物に對しても、材料といふものは相當の意義を有する。けれども之は、どこ迄も消極的なる意義に止まる。即ち美的否定をなすといふ意義を有する。併し又、之と同時に、一の積極的の意義も遂行される。けれどもかゝる積極的意義といふものは唯、美的に否定をされないものが、その十分なる位置に迄高上せしめられ、さうして之と共に、十分なる藝術的效果を及ぼすに至るといふ事のみから、

成立するのである。

之に反し裝飾的描寫物に於ては、關係は全然異なる。之に於ては、材料といふものは、美的に否定をなすといふ事のみを以て満足しない。之に反し、之は藝術品に對し、或は藝術品によつて具體化された生活に對し、一の積極的貢獻をなす。勿論材料なるものは、此の場合にも否定をする。即ち正しく材料中に存する生活が、藝術品の内容中に於て働く丈の程度に於て、その材料といふものは、再生の手段と爲されては居ない。此の如くある事の代りに、正しく材料そのものゝ生活が、藝術品の内容中に進入するのである。

之を例へていふと、銅版畫、即ち鏤蝕術に於ては、自己の色及び細粒を有する紙といふものは、描出された事物の色及び表面構造を否定する。之は、此の術の、全體にして、而も少からざる効績である。此の場合に、紙の色及び顆粒といふものは、決して藝術品の内容、即ち生活内容には屬しない。之に反し、「ガラス」繪畫に於ては、「ガラス」窓、及びその「ガラス」と「ガラス」質、即ち「ガラス」色の透明、かゝる色が正しく「ガラス」色として有する所の特異なる華麗などゝいふものは、藝術品に迄屬する。換言すれば、吾人が藝術品の觀照に於て併せて體驗する所の生活に迄屬する。確かに之に於ても、材料の此の如き元素により、その元素が材料に屬する程度に於て、描出された事物の右に對應する所の元素といふものは、美的に否定をされる。

一例を挙げると、衣服の赤又は青を再生し居る所の、赤又は青の「ガラス」色といふものは、それが精密に赤又は青の「ガラス」色である程度に於て、描出された衣服、例へば毛織又は亞麻製の衣服の色ではない。かゝる事實の中には、美的否定、或は之をより精密に云へば「現實離隔」といふ作用が存在する。さうして此の如くして、

各の裝飾的藝術品といふものは、それが正しく裝飾的である程度に於て、詳言すれば、それが一方に於ては材料の生活、他方に於ては、外圍の生活の韻律をば、藝術品中に描出された生活中に取り入れ、或は之と合體して唯一なる生活連絡を綜織する程度に於て、現實否定をなすのである。されど此の如き被否定物に對する補償としては、正しく、材料の生活、即ち今の場合に於ては「ガラス」及びその色の特異なる生活といふものが、描寫物の意義、即ちその中に描出された生活の中に加入する。さうしてそれは、その中に、一の副貳的の附加物としてではなく、之に反しかゝる生活の一の根本容狀、その生活の一般的の雰圍氣、又は反響として、更に換言すれば、その根本性質を確定する所のものとして、加入する。即ち今の實例に於ては、吾人は之をば特に、かゝる生活の「根本色」と云ひ得るのである。

吾人は言明するが、裝飾的描寫の材料なるものは、現實離隔をなすと。之は、材料が、かの描寫藝術に於て現實離隔即ち理念化さるゝといふのと同じの意義に於ての現實離隔即ち理念化作用である。併し裝飾的藝術品中に於ける理念化作用なるものは、同時に一の物質化作用である。換言すれば、否定さるゝ被描出的生活の代りに、材料及び物質的外圍の生活といふものが現出するのである。かくて被描出物といふものは理念化される。換言すれば、それ自らが屬する所の現實といふものに、益々離隔さるゝやうになる。されど之と共に、正しく、藝術品といふものは益々多く、それを描出する所の材料の現實中に推進せられ、さうして、之により始めて、外圍の現實中に推進せらるゝやうになる。由來描寫藝術の範圍内に於ける現實離隔の最終の目的といふものは、例へば任意の紙片上に於ける、無色にして、さうして僅少なる線を以て表示せらるゝ所の鉛筆略畫である。之に反し裝飾的

藝術の範圍に於ける現實離隔の最終の目的なるものは、もはや何ものをも描出しない所の輝ける色の「グラス」、又は規則正しい多くの形に迄研磨された寶石たるのである。

三 以上の外の實例

裝飾的描寫の以上擧げたるが如き實例に、吾人は今故意に、之と稍異なりたる一の實例、即ち織られたる描寫、或は「編まれたる」描寫といふものを先第一に對立せしむる。此等二つの實例はよしや異なつて居るとはいへ、而も觀照の原理に於ては同一たるものである。吾人は上に言明する事ができた。繪畫的に描出をなさうとする所の藝術家なるものは、正しくその描出をなすに就いて「グラス」の上に畫く程拙劣なる如何なるものをも畫く事はできぬと。即ち「グラス」には、純粹の繪畫的描出は不適當である。ところが又、描出物を織つたり、編んだりする事よりも、より多く不恰好なる何ものをも、彼れは確かに爲す事はできないのである。けだし藝術家に對して意義を有する凡ての規則なるものは、吾に藝術家に對するのみならず、各人に對して自明なる所の規則に於て統括され得る。かゝる規則とは、「汝が意圖する所のものを知り、さうして汝の目的に對し、その目的を遂ぐるに適當なる手段を使用せよ」といふ事である。そこで、若しも此の如き一般的規則にして、藝術家に對して有効であるとするならば、それは唯藝術家のみに關するといふ特殊なる點許りである。之は此の故に、茲では唯次の如き特殊なる文句となる。曰く、「汝が藝術家として何を意圖し得るかを知れ。換言すれば、或る與へられたる場合に於て、如何なる生活をば、藝術品中に於て完全に直觀的になし、さうして十分なる享樂及び體驗に迄直接に提示

し得るかを知れ。次に若しも汝にして之を知り得たならば、之に對して適當なる手段を使用せよ」と。

吾人は、かゝる言が如何なるものを意味するかを前既に知得た。それは即ちかういふ事である。藝術家にして一度特定の目的を抱いたならば、即ち彼れにして一たび特定の生活を直觀化しようと思圖したならば、然る時には彼れに對して要求される。それは彼れが、此の目的の實現に對して、他の手段よりも、より適當にして、且つ最も完全に實現を仕遂ぐる所の手段を使用するといふ事である。さうして此の逆に、若しも手段にして一たび與へられたならば、彼れに對して、彼れがその目的を追求するといふ事、詳言すれば、此の手段を以て最も完全に達し得らる、といふ生活の直觀化に對して配慮するといふ事が、要求される。更に之よりして次の如き結論が發生する。若しも藝術家にして、何等かの手段を以て一の目的を達する事ができないならば、彼れはかゝる目的を抱いてはならぬと。して又、尙一の特殊なる結論としては、彼れがその手段を以て十分なる終末に迄到達し能はざる所のものをば、彼れは始めから自發的に意圖してはならぬ。彼れにして完全なるものを作造し、さうして不十分なる印象といふものを最後の結果として發生せしめないやうにする爲には、彼れは、此等凡てのものを爲さねばならぬ。彼れが如き完全なる結果といふものをば、彼れは正しく藝術家として意圖すべくある。けだし各の藝術家なるものは、その範圍に於ける完全なるものを意圖すべくあるからである。

さうして若しも描寫の爲に、織るとか編むとかいふ事が爲さるゝならば、その目的といふものは何であるか。いふ迄もなくそれは先第一に、織らるゝといふ事、即ち絲が相互に重ね且つ綜織せられ、之により、一の平面が發生し、さうして其の平面が限畫せられ、又平面の全體中に於て、織物藝術が、他の藝術と異なつて發生せしめ

得る所の、形及び色といふもの、特異なる生活を現出せしむるといふ事である。かの描寫ある絨氈といふものも亦一の織物である。之は、かの全然模様づけられた絨氈と同様に、一の絨氈である。之は此の如きものであるべく要求する。随つて又此の如きものであらねばならぬ。之は絨氈として、絨氈たる要求を提出する。之は特に、織物の有色の生活、而も任意なる織物ではなく、之に反しかる特定の織物、例へていふと、絹又は毛の織物の有色なる生活を、その中に帶有するべく要求する。さうして絨氈にしてかゝる要求を提出する以上は、それは此の要求を充たさねばならぬ。若しも斯かる要求にして充たされずにあるならば、既に曾て言明したる如くに、不十分なる産物が發生するのであつて、此の如き産物は、實に藝術家に取りて大禁物たるのである。

世に普く知られ居る如く、人にして、時とすると、絨氈の上に實際「繪畫」を試みようとする者がある。例へば肖像を畫かうとするが如きである。さうして更に進みては、此の如き織物繪畫を一の枠の中に入れる。併しながら絨氈描寫物なるものは、本來畫く事によつて發生するものではなくて、織る事によつて發生するものである。さうして絨氈そのものは、床上に存在する所のもの、又は壁に密着する所の或るものである。之は、一の理念的世界のそれ自身に於て無意義なる帶有者ではない。ところが此の如き帶有者に對してのみ、右の枠なるものは意義を有するのである。

併し此の事は、絨氈織出し作用なるものは、一切の繪畫を斷念せねばならぬといふ事を意味しない。されど之は、唯、絨氈の彼れが如き要求によつて與へられてある所の前提の下に、又その限界の範圍内に於てのみ、描寫をなし得る。言ひ換へると、繪畫描出なるものは、茲では唯織物の裝飾であり、他の世界からの形を取入れる事

によつて、絨氈が有する所の生活を特異に刻印し圖解する所のものなのである。

上に出發點となした所の「グラス」繪畫なるものは、磁器繪畫並に「マヨリカ」繪畫に比較的近く立つ。そこで一の描寫物を畫かうとする所の藝術家にして、可能的完全なる描出を目的としさうして磁器又は「マヨリカ」の上に繪畫を試みようとするといふ事は、最大なる「藝術的」不合理の作用であり、此の如き藝術家は、決して完全なるものではなく、之に反し、不十分、意圖して而も不能といふ極印を有する所のものを産出するに至るに過ぎないのである。

然らば、その此の如くあるにも拘はらず、何故に藝術家が磁器又は「マヨリカ」の上に畫くであらうか。それは、正しく彼れが磁器又は「マヨリカ」の上に畫かうと欲するからである。換言すれば材料の爲である。さうして此の事は意味する。形及び色が、磁器又は「マヨリカ」の上に寫し出されてあるのは、それ自らの價值を生ずるからである。而も斯くあるといふと、彼れが此の種の價值を十分發揮するに努力するのは當然の事である。更に之は、次のやうな事を意味する。今特に磁器の例に就いていふならば、磁器の上にある描寫物の色なるものは、先第一に磁器の色であり、さうして此の如きものとして働くべく要求する。之は正しくかの毛織物の色が、先第一に毛の色であり、さうして此の如きものとして働くべく要求する。次に、形が磁器といふ容器を裝飾するといふ事、換言すると、磁器の形の中に存する所の生活をば、より十分に且つより高遠なる形成に達せしむるといふ事は、正しくかの繪畫絨氈を作出しようとする所のものが、絨氈の生活をば、より十分なる形成に達せしめようとすると同様である。

併しながら各の色といふものは、同一の方法に於て、磁器の色又は「マヨリカ」の色として効果を及ぼさない。又各の色なるものは、同一の方法に於て、かゝる材料特有の表面性状を承認しない。既に前に述べたのであるが、磁器或はその坳薬被覆の光線の性状には、先第一に淡い色といふものが適合するのである。されど各の場合に於て、磁器繪畫なるものは、その實物模造を仕遂ぐる爲に、磁器の色を死滅せしめないやうにすべき事を要求する。さうして色を塗抹するに際しても、藝術家なるものは、先第一に、その色が果して被描出物に適合するや否やといふ事ではなく、之に反し、之が磁器に對し、又かゝる輝々たる材料の條件の下に、美しき色の調和を發生せしむるや否やを攻究すべきである。都合によると、故意に、事物の色の代りに、どこ迄も色の働きによつて制約されて、全然異なりたる色が現出せしめらるゝ事もある。否色なるものは、始めから事物の色ではなくて、磁器の色である。さうして現實の事物といふものは、決して磁器的事物となる事はできない。而も果して此の如くあるとすると、色といふものは、先第一にそれがある所のもの、即ち磁器の色でなければならぬ。さうして茲に至つて第二の疑問が起る。曰く、何等の程度迄、此の如く設定された限界の範圍内に於て、事物の色がその權利を主張し得るか。

して又、色が材料に従屬すると同様に、描寫物の形といふものも、勿論、容器の形、その分員、並にその中に存する所の生活の韻律に従屬すべくあるのである。

四 壁 畫

吾人にして今、裝飾的平面藝術の上に擧げた實例に尙一度復歸して考察し見ると、壁畫に於ても、原理上之に於けると同様の關係が存する。之に關しては、一部の人は、壁の面なるものは、一の平面であり、さうして此の如きものとして自己を主張すべくあるといふ事を高調し、それから之よりして、描出に際し深さに迄進入してはならぬといふ、要求を導出する。けれども斯かる要求の中には、先第一に一の誤解が存する。けだし壁畫なるものは、各の繪畫と同様に、常に、三次元の空間に屬しさうして此の中に進出したり退入したりするといふ事物を描出する。そこで一度此の如き現出及び退入が起るとするならば、此等が何故に或る限界に於て止まらねばならぬかといふ理由を發見される事はできない。かくて各の場合に於て、かのやうな要求といふものは、必然的實行を見る事はできない。即ち一般的の深さなるものが缺損されるといふのは、不可能なる事柄となる。して又、右の要求なるものは、それが通常提出せらるゝやうな形式に於ては、矛盾である。そは、各の繪なるものは、たとひ被描出物が甚だ多く深さに迄進入するにせよ、尙それは一の平面上に於ける繪畫であり、さうして深くさるゝ所のものは、唯描出された空間であるからである。簡言すれば、描出された深さと現實の平面性とは相互に矛盾しないからである。

併しながら平面性といふ自然的要求なるものは、凡ての裝飾的繪畫に對して成立する。されど斯かる要求は、右と異なりたる意義及び異なりたる根據を有する。それは即ち、既に「グラス」繪畫に於て説示したものである。蓋しかの明瞭なる線と色といふものは、裝飾的のものである。さうして弛解せる線、光線から陰影への移行、實物模造の爲に來る色の消滅といふものは非裝飾的のものである。更に非裝飾的のものは、空氣、雰圍氣、

遠隔といふものであり、景色といふものも、それが、空氣、雰圍氣、遠隔、及び形と色との不定確、目に對するその消失などによつて働く限りに於ては、非裝飾的である。此の如きが故に、壁畫に對しては、平面性自體ではなく、之に反し、形及び色の明瞭なる定確といふものに對しての條件たる所の近隣といふものが要求せらるゝのである。

尙此の外に、壁畫に關しては、原理上、「グラス」繪畫に關すると同一の事項が効力を有する。即ち壁畫が一の建築的連絡に屬するといふ事情は、先第一に、繪畫的描出に際し、建築的生活に最も類似せる所の物體的生活といふものを重視するに至らしむる。さうして此の外に、次の如き事も附加され得る。かの「グラス」繪畫の「グラス」と同様に、壁及び壁の石灰天井といふものは、それ自身に於て無意義である繪畫的地面ではなく、之に反し、建築的全體の全生活中に於ける完成的要素を構成するといふ生活の帶所有者である。此の故に、石灰天井そのものは一の美的存在權を有する。さうして之は特に次のやうな事を意味する。色といふものは、單なる色ではない。之に反し石灰の色であつて恰も「グラス」繪畫の色が、「グラス」の色であるが如くある。斯かる色が、石灰天井との密接なる結合によつて取得する所の石灰の輝きといふものは、その色の本質に屬し入り、さうしてそれに對し、壁畫の範圍内に於て特殊の價値を與へる。同時に此の如き輝きは、繪畫の内容を統一化し理念化する所の媒介物となる。かの明と暗、特に黒と白との明瞭なる反對といふものは、かゝる媒介物と矛盾するものたるのである。

併し此の事を別にするも、全然たる暗黒といふものは、水彩畫の考察の際に特に高調したる所の理由よりして壁畫に於ては除外さるべくある。既に述べたのであるが、無光線の暗黒なるものは、一の無である。即ち單に死滅せる或るものであり、さうして斯くあると同時に、繪畫の意義の否定者となる。かの油色の暗黒は、正しくそれを油色たらしむる所のものゝ爲に、光線である。併し鈍い壁畫の色といふものは、それに對し一の自然的の補償を取得する。即ち石灰天井の光線が暗黒を透照するが爲に、之は生活を取得するのである。

世には麻布に於ける油畫をば、人物畫、動物畫、景色畫と稱する。さうして決して之をば麻布繪畫と稱しない。之に反し、「グラス」や磁器に於ける繪畫をば、吾人は「グラス」繪畫及び磁器繪畫と稱し、更に壁に於ける繪畫をば「壁畫」と稱する。一體言語の使用法なるものは、時とする甚だ適切なる判斷を示すのであつて、此の場合に於ても、右の如き使用上の差異は、此等の藝術の原理上の異論を識認せしむるのである。實に、彼れに於ては、麻布なるものが問題とされない。之に反し、景色、動物、人間などが問題とされて居る。之に反對して、之に於ては、先第一に、「グラス」とか磁器とか壁とかいふものが、その本性を發揮するといふ事が、問題とされるのである。

五 裝飾的性質の特殊の條件

裝飾的彫塑に關し既に判明に高調して置いた所の、裝飾的藝術に對する重要な點は、今取上げ居る所の裝飾的平面描寫藝術に於ても、判明に説示されねばならぬ。

裝飾的藝術品の統一性、即ち一方に於ては、その中に描出された生活、他方に於ては、それが裝飾的に適入されてある所の生活連絡といふものから成る統一體に對する外部的條件としては、吾人は次の事を説示し置いた。

曰く、吾人がそれ自身に方て一の物質的のものである所の被裝飾物と、彼れが如き生活の物質的帶有者とをば、直接に統括する事が能きるやうにあると。之を他語を以て表出すると、裝飾的藝術品なるものは、それが裝飾をなす所のものと合體して、一の直接なる把握上の統一體を構成すべしといふ事になる。實に此の如き統一體といふものをば、例へていふと、かの「ゴチック」の建築と、此の中に適入された「グラス」窓といふものが、明瞭に構成するのである。

併しながら又、一の平面といふものは、それが適入されてある所の全體、或は其の全體の特殊の生活といふものに、空間的遠隔、即ち物質的遠隔に立つ事がある。かゝる場合には、同時に、裝飾をなさうとの平面上にある所の描寫物の要求といふものは、減少される。随つて純粹なる描寫物として現出しようとの其の正當といふものは、増進せらるゝやうになる。

されど此の如きは、以下述ぶるが如き幾多の事を意味する。第一には、描出材料、即ち描寫物を現出し居る所の平面の、換言すれば「繪畫地面」の、材料と、色の材料とが、描寫物が適入せしめらるゝ所の外圍に對して異縁である。此の如き時には、描寫物と外圍とは、之に應當して、異縁無縁的に對立する。ちやうど此の反對に於て、材料の同一性といふものは、描寫物と外圍とを、より緊密なる方法に於て相互に結合するのである。さうして此の如くして、此の場合に於ては、彼の描寫物と物質的外圍との空間的結合、特に一の建築的連絡に迄の其密接なる空間的適入が通常處理さるゝが如くにある。されど同時に、次の事も言明されねばならぬ。曰く、右の反對に、材料の差異といふものは、直に建築的全體に對しての、描寫物のより、少く、密接なる空間的結合といふ

ものを自然の理として要求すると。之を簡言すると、之に關しても亦、一方に於ては、裝飾的彫塑描寫品、他方に於ては、それが屬する所の建築的連絡の、材料の同一及び差異に就いて上に言明された所のものが、有効であるのである。

尙此の外に、描寫物とその外圍との各の密接なる空間的の統一化といふものは、描寫物に對する其の外圍のより、大なる優勢を來さしむる。随つて、描寫物中に於て描出された生活の中へ、建築的生活、その性質及び韻律のより強い受納、感官的、物體的生活、範型的普遍なるものゝより獨占なる高調、簡言すればより顯著なる「建築化」を來さしむるのである。

併しかゝる場合には勿論、建築的生活といふものが、それ自らの性質上、如何様に優勢であり得るかといふ問題が存する。或る場合には、一の建築的生活といふものは、より高度に、靜穩確實なる存在といふ印象を優勝ならしむる所の廣い平面中に於て發展する事が能きる。此の如き平面といふものは、より多く、任意自由に發展する所の、描寫物の生活に對し、白紙とも稱すべき中性的舞臺として提供される。

次に他の場合には、一の建築的全體中に於て、特定の建築的官能の印象が優勝する事がある吾人は知得する。例へていふと、「ゴチック」建築に於ては、常に官能といふものが多くの成員に迄凝縮さるゝといふ事を。そこで此の如き事が益々多く事實であり、さうして建築的官能の韻律といふものが、益々多く進入して全體の印象中に於て優勝し、平面の靜穩確實なる存在といふ印象が益々多く退減するに隨ひ、此の如き韻律といふものが、描寫品の内容、例へば彫塑的描寫品のそれを運び去り、自由に發展する所の描寫物、即ち固有の描寫物に對する空間

といふものを、益々僅少ならしむるのである。

更に他方に於ては、描寫物といふものが、建築の構造的な生活の點、即ち此の生活が凝縮されて見ゆる所の場所から、故意に退却し、その限界によつて建築的官能の一範圍を限制し、之と共に、己れ自ら、一の中性的範圍を出し、さうして今やかゝる範圍の中に於て、それが中性的範圍になつたが爲に、より自由に發展する事がある。吾人は之に關しては、簡單なる一の實例を想起しよう。それは即ち「ラッファエル」の「記號の室」に於ける壁畫といふものである。之に於ては、壁畫、例へば「アテン」式のもので、壁の全面をば、床、天井、並に附近の壁と接觸する點、隨つて壁が性質上構造的に活動して見ゆる所の點迄、充たさない。之に反し、下方には壁の土臺、上方の周圍には、空虚なる壁の長平面が區劃されてある。そこで、右の土臺といふものは此の長平面と合體して、一の枠或は一の確固たる組織を形成し、さうして斯かる組織中に於て、確固たる直立、附近の壁との交互影響、並に天井の支持といふ建築的官能が統括されてあるのである。

さうして斯かる枠の確實性といふものは、吾人の印象に對し、建築的全體に確實性を與ふるに十分する。更に此の如くある事により、描寫物により覆はれた壁の部分といふものは、中性化される。即ちそれは、中性的平面單にそれ自身の中に存留する所の壁となる。その内容上建築的な任務といふものは、之に對して取去られる。さうして今や、かゝる壁の部分といふものは、より高度に、自由なる描寫物帶有者となる事が能きる。言ひ換へると、描寫物といふものが、正しく建築的官能といふ思想から分離されるが故に、より自由に發展し得る。即ちより多く描寫物として發展する事が能きる。同時に、「ラッファエル」のかゝる壁畫に於ては、勿論描寫物帶有者が

附屬し居る所の空間が、建築的に單一にして、さうしてかゝる單一の爲に無要求なる空間となるといふ事も、考慮さるべくある。之は此の如くなると共に、描寫物に對し、より僅少なる要求といふものを提出する。隨つて描寫物は、之により又、より自由になり得るのである。

之と同様の方法に於て、建築的連絡、テクニシヨニ 製造的連絡中、クラフツニ 於ても、常に中性的平面といふものが、作造されたり、分離せしめられたりする事が能きる。或は、建築的官能が特殊の成員に迄凝縮されたといふ事情の爲に、平面といふものが、それ自身に於て中性的の平面になる事が能きる。更に又、單なる充實といふ性質とか、或は到る所同様の方法に於て存留する所の空間完結體の性質とかを有する事が能きる。同時に他方に於ては、外圍の生活の單一の爲に、描寫作用といふものに對し、より大なる自由が與へらるるのである。

今や容易く理解し得らるゝ如く、ちやうど今説示した事實により、吾人が前既に攻究した所の、裝飾の原則に新に接觸するに至るのである。さうしてそれが前に攻究したものと異なる點は、唯その場合には、特に裝飾的彫塑に就いて説明し居つたといふ事である。吾人は知得した。裝飾をなす所の彫塑的の形なるものは、多くの段階に於て、裝飾さるゝ所の形、即ち基本形と共に統一化さるゝといふ事を。又此の如き統一化にしてより密接である程、益々多く、自然の理として、裝飾形といふものが、建築的法則、隨つて抽象的生活的法則に從屬し、益益多く範型的のものが優勝し、最後には、形の十分なる建築的嚴密と抽象性とに到達するやうになる。さうして之と精密に同一なる言明が、吾人の玆に特に語り居る所の繪畫的裝飾、即ち裝飾的繪畫に就いても、成立するのである。

第四章 裝飾的の平面描寫藝術と彫塑とに對する細説

一 臺と枠との分割的效果と結合的效果

今茲では、裝飾的描寫藝術の兩種類、即ち彫刻と繪畫とに關しての重要な留意事項を述べて見よう。かの臺なるものは、彫塑的の描寫品をば、その外圍から分割し、さうして之と共に、より高度に、即ちより自由、その外圍、特にその建築的外圍から、描寫物として現出し得るやうにならむ。更に他方に於ては、次のやうな事が曾て重視された。曰く、かゝる臺といふものは、それ自體に於て一の建築的の形體であり、さうして之が爲に、描寫品をば、直接に、建築的全體の部分として顯現せしめたり、或はその全體に迄結合したりするといふ事である。而も此の如くあるよりして、描寫品の裝飾的性質といふものは發生するのである。此の故に吾人は知得する。一方に於て描寫品を離隔し、之と共にそれに對し描寫物といふ性質を附與する所のもの、即ち右の臺は、他方に於ては、それをば外圍の物質的生活連絡に迄結合し、さうして之に對して裝飾的性質を附與したり、又は斯かるものを要求せしめたりするやうになると。そこで今や問題が起るのである。與へられたる場合に於て、一の描寫品の臺の分割的官能と結合的官能とは如何なる状態にあるかと。言ひ換へると、何等の程度迄、臺がその外圍と統一せられ、さうして之と共に、描寫品を統一化するか。或は如何なる程度に之と反對の事實

が存在するかといふ事である。

併し之と同様の事は、平面描寫物、即ち繪畫の枠に對しても成立するのである。

此の如き枠といふものも亦、一方に於ては、描寫物に對する完結的の枠であり、他方に於ては、大なり小なりに、一の大きな連絡、特に建築的連絡の一部として、現出したり、若くは、同一の連絡中の他の成員と交互影響に立つ所のもの、成員として現出し得る。此の如き成員として現出する事が多ければ多い程、益々多く、臺又は枠といふものは、描寫藝術品をば、かゝる連絡と綜織せしめ、さうして之と共に、之をば裝飾的のものとならしむる。併し此の際に於ては、個々のあらゆる種類の差異に留意をせねばならぬ。

けだし枠といふものが、第一に、根柢に於て既にその名稱が言明する所のものであるや否やといふ事、換言すると、周圍に同一の方法に於て包括作用をなし、隨つてその全體の本質上總方面内部に、枠づけらるゝ所の描寫物に關係せしめられてあるや否。又は第二に、此の枠、が建築的に構成せられ、さうしてそれと共に、先第一に、描寫物に迄でなく、己れ自らに迄關係せしめられ、己れ自らの存在能力を配慮するや否、例へば枠の下部の邊といふものは、側面の邊に對して基底となり、さうして此の側面の邊は、右の基底から直立し、己れも亦上部の邊を支持するや否やといふ事は、全く異なりたる事柄である。此の第二の如き種類の枠、即ち天幕的枠といふものは、必然的に、描寫平面をば、此の如き種類の運動の中に引入れ、さうして之と共に、之に對しその中性を取去る。之に反し第一種の周圍に取巻きをなす所の枠といふものは、中性化の力を有するのである。

或は又、枠といふものは、その形とか、構成とか、裝飾とかの爲に、描寫物に對し、それ自身に立留まる靜穩

なる場所を作造附與し、さうして外界によりて觸れられない中性的舞臺をば描寫物の生活の自由なる發展に對して提供する所のもの以外のものを意圖する事が能きる。かゝる枠は、右の外に、己れ自らの生活に對する要求を提出し、さうして始めには己れ自身に迄關係せしめられ、次には、圍の現實に迄關係せしめられた技巧的藝術品であるべき要求を提出する。之は、之々の方法若くはそれ／＼の方法に於て、先第一に描寫平面、次には描寫物の内容をばそれ自らの運動の中に引き入れ、進んではその外圍の物質的的生活の中に引き入れ、綜織をなしさうして之と共に、描寫物を建築化する。即ち裝飾的になす。之は、此の事をば、大なり小なり既にその色によつても仕遂げ得るのである。

枠が描寫物に迄彼れが如く關係せしめられてあるといふ事の中には、尙他の状態、即ち壁に懸けられた描寫物の縁といふものが、その描寫物の方に凹めらるゝといふ事も包含されてある。さうして描寫物に對する此の如き積極的關係といふものは、若しも他方に於て、枠といふものが、壁から鋭く興起する場合には、換言すると、壁面から鋭く現出し、云はゞ故意に突然なる急動を以てそれから分離せらるゝ場合には、強固にされる。之に反し若しも枠といふものが、右の反對に、描寫平面から壁に對し己れ自身を傾斜せしめ、或はそれに迄密着せしめらるゝ場合にはその枠は、己れ自身、並にそれと共に、描寫物をば、外圍に迄結合せしむるに至るのである。

更に又、描寫物といふものが、不動的に壁の或る場所に迄附屬して居るや否、又は、正しくかゝる位置に於て場所があり、さうしてそれが觀照者により便宜に觀照され得るが故に、偶然的にそこに存在するやうに見ゆるといふ事は、全然異なりたる事柄である。前の場合に於てはより高度に、後の場合に於ては、僅少なる程度に於て

裝飾的であつたり、又は此の如くあるべく要求する。尙之に關しても亦、彫塑的描寫品に關すると同様の言明が成立するのである。

さうして之と同様に、畫かれたる描寫物に於ても、それがその全背面を以て壁に觸るゝや否又はそれがそれに對し斜に傾くや否、即ち換言すると、その上部の端を以て、下に立つ所の觀照者に傾いて見ゆるや否やといふ事は、一の差異である。更に此の際に於ても、描寫物が、前の場合にはより高度に、後の場合にはより低度に、裝飾的の要求を提出する。此の後の場合に於ては、それは判然外圍から分離し、都合によると觀照者の方に傾く。之はかの物質的連絡から分離し、さうしてそれを享樂しようと欲する所のものに對し、理念的關係に立つやうになる。

今や如何なる實際的の歸結が、上述の事項からして發生するかは容易く了解され得る。それは即ち、畫かれたる描寫物を壁に懸ける方法に關しては、何等の程度迄、それが、描出された事物の爲に裝飾的になり得るか。或は何等の程度迄、それが反對に、裝飾的效果を拒絶するかを常に注意するといふ事である。

尙此の外に、描寫物をば外界から分割する所の枠に對しては、枠の廣さ、隨つて外圍の現實から分離するの廣さといふものは、固より重要なものである。總じて描寫物にして益々多く描寫物であればある程、益々多く、外圍からとのより大なる遠隔、並により判明なる分割といふものをそれが要求するのである。

されど上に既に説示したる兩反對者、即ち一方に於ては描寫物とその外圍との關係、他方に於てはそれと觀照者との關係といふものは、特に重視さるべくある。第一に、描寫物といふものは、一面には、壁及び他の外圍に

關係し、他面には之に關係なしに、さうして此の代りに單に觀照者に關係して、それが存在する所に存在するやうに見える。それから第二には、それがそれ自身に關係し居るが如くに空間的に關係し居るやうに顯現する事が能きる。此の第二の場合に於てはそれは描寫物として特徴づけられ、その本質としては、觀照者と獨立の理念的關係に立つといふ事が包含される。さうしてその「意義」といふものが、云はゞ觀照者に透徹する事により、それは判然次の事を説明する。曰く、それは一の描寫物であつて、さうして觀照者に對立する所の尙他の物質的、即ち物理的實世界の一部ではない。簡言すると裝飾的のものではない。

吾人は繰返して言ふが、裝飾的であるといふ事は、感官的であるといふ事、或は感官的效果を目的とするといふ事を意味すると、詳しくいふと、物體的生活、感官的顯現の美麗、空間中に於ける排列の均衡、「物體的」の形及び色に於て直接に吾人に對して存する所の生活といふものを重視するといふ事である。かくて之は、内部的のもの、内容的に精神的なるもの、並に空間生活の内部的のものなどを重視しないといふ事を意味するのである。裝飾的描寫物に對して要求さるゝが如き感官的のものゝ高調といふ事をば、吾人は屢々「理想的態度」と稱した。そこで斯くあるとすると、裝飾的藝術なるものは、より高度に理想的のものである。されど吾人は、此の如き「理想的」藝術をば、「物質的」藝術と呼ぶ方が、より多く適當するのである。

一例を擧ぐると、「ラッファエル」の繪畫に關しても、吾人は通常、それが「レンブラント」の繪畫よりも、より多く裝飾的性質、隨つてより感官的にして且つより「彫塑的」なる性質を有すると云ふ事が能きる。否彼れの繪畫の多くは、祭壇の繪畫として、一の建築的連絡の中に永久附屬せる要素として適入すべく計圖されてある。此の

アンタールヒルダグ

如くして、之は、純粹なる描寫上の效果、即ち純粹なる「繪畫的」效果を目的とする事は能きぬ。さうして吾人にして若しも、それが始めに附屬し居る所の全體中から取出されてあるといふ事情の爲に、之をば純粹なる繪畫として觀照し享樂しようとするならば、是之を誤解するといふものである。して又「ラッファエル」の藝術をば、世人は「レンブラント」のよりも、より多く理想的なるものと呼ぶ。之に關しても亦、吾人は、之をより多く物質的なるものと呼ぶ方がより正當であると云はねばならぬ。

本來「ラッファエル」の藝術なるものは、彼の一層精神的にして、さうして此の意義に於て一層理想的なる「レンブラント」の藝術よりも、感官的生活、隨つて物質的なるもの、物體的なるもの、感官的顯現の美といふものをより多く目的とする。されど吾人にして、上記の如き傳來の語句を愛好して使用するならば、吾人は先第一に言明せねばならぬ。理想的藝術なるものは、その反對の現實的藝術よりも、より少き程度に、判明に分割をなす所の枠を要する。換言すると、より多く感官的物質的藝術なるものは、その語のより高く且つより深い意義に於ける理想的藝術よりも、より少き程度に右の枠を要する。例へていふと、身體的顯現の莊麗を目的とする所の大なる人物畫は、浮世繪や景色及び靜穩なる生活の繪よりもより輕度に、判明をなす所の枠を要するのである。さうして同時に、景色繪とか靜穩なる生活の繪とか浮世繪とかに於ては「理想的」の人物畫に於けるよりも一層多く、懸垂の方法、即ち繪畫が上部の端に於て壁から遠かり、隨つて斜に置かれてあり、さうしてその平面に於て觀照者に迄傾く所の仕方といふものは、一の意義を有する。此の外、若しも此の如き「現實的」の繪畫にして、偶然的に、又は觀照者の便利の爲に、何れかに懸けられたり、立てられたりし、かくて一時的に一の連絡中に適入

されあるやうに見ゆるならば、然る時には、それが裝飾的要求を起さうとの危険は、甚だ僅少になるのである。

二 枠と臺との缺損の條件

吾人は今、枠といふものゝ離隔的效果の反對面をば、尙一層詳細に考察して見よう。かゝる反對面をば、吾人は上に知得した。曰く何等の程度迄、枠の特殊の構成、並にそれを壁に懸くる方法といふものが、描寫物を外圍と統一化せしむる所の効果を及ぼすか。換言すれば、それに裝飾的性質を與ふる事が能きるか。

されど吾人は尙一步を進め、さうして彼れが如き統一化の効果を及ぼすといふ事は、根柢に於て、或る程度迄はいつでも事實であるといふ事を言明せねばならぬ。一般に枠なるものは、かゝる二重面、即ち兩面性を有する。けだし此の枠といふものは、よしや描寫物を外圍から離隔せしめ得るにもせよ、尙之は、かゝる離隔をなさしむる事により、同時に或る程度迄は、己れをば物質的生活の一の連絡中に引き込まざるを得ないやうになる。さうして之は單にかういふ簡單な理由からである。枠なるものは、常にそれ自身に於て一の物質的生活の帶有者であるからである。即ち己れ自らが、一の技工的にして、特に築造的形體、即ち最廣義に於ける建築的の形體であるからである。さうして吾人にして、若しも一の平面描寫藝術品にして、それが建築化即ち物質化の各の種類、随つて各の裝飾的意義をば、その全體の本質上、自然に除去し、さうしてそれ自身に於て全然單に描寫物であり、且つそれ自らの本質によつて、判明に此の如きものと現出するといふやうな性質のものであると假定するならば、然る時には、此の如き描寫物といふものは、枠、並に描寫をば物質的外界に對して離隔せしむべく最も多く努力

して見ゆるといふものに對し、全然拒否的態度に出づるに至るのである。

先第一に、かの銅版畫、並に進んでは木版畫なるものは、此の如き性質のものである。今實例を銅版畫に限畫して見ると、銅版畫なるものは、それが、現實的世界でなく、之に反し全然理念的世界を取扱ひ居るといふ事を證明する所の離隔作用といふものを要する。併し此の如き離隔作用をば、之に於ては、白色の紙縁が遂行する。さうして此の縁といふものは、描寫物の内容をば、同時に物質的生活の範圍中に引き入るゝ事なしに、之を遂行するを得。而もそれが之を遂行し得る理由は、紙なるものは、描寫物そのものゝ中に於ては、此の如き物質的生活の帶有者としてではなく、之に反し全然描出されたる理念的生活の帶有者、即ち「描寫物帶有者」として考察され居るからである。或は又、此の紙は、描寫物中に於ては、換言すれば描寫物の範圍内に於ては、何等の物質的官能を有せず、之に反し全然此の如き理念的官能を有するからである。けだし紙縁なるものは、描寫物の境界の範圍内に於て、此の如きものとしてのみ顯現する事により、之はかゝる境界の範圍外に於ても、亦此の如く見ゆるのである。之は此の故に、一の「枠」である。而も非物質化されたる枠、即ち物質的構造的ではなく、之に反し理念的に官能する所の「枠」である。之は十分有効に離隔せしむる所の界線である。けれども斯かる界線が描寫物をば、物質的生活の連絡中に綜織せしむるといふ可能はない。之は、之丈の限りに於ては、枠ではなく、之に反し唯描寫物の外迄出づる所の畫面、即ち描寫の境界を超越して描寫物帶有者である。併し銅版畫には、此の如く離隔せしむる所の界線が必要であるのであるが、さり逆之は、かゝる界線をば、油畫の枠、即ち物質的にして随つて何等かの程度に物質化をなす所の枠の意義に於て容認しないのである。

最後に裝飾的描寫藝術と純粹なる描寫藝術とは、その極端に於ては一致する。蓋し前者たる壁畫なるものをば、その材料に對して異他無縁なる枠を以て圍繞すべきではない。何となれば、壁畫は、先第一に壁に對し、畫に外部的でなく更に内部的にも附屬し、次に此の壁を透して、より廣大なる建築的全體にも此の如く附屬する。然るに枠なるものは、外圍に對する斯る附屬を拒否するからである。簡言すれば、枠なるものは分割をなし、さうして物質離隔をするからである。次に右の後者たる銅版畫なるものは、何等の此の如き枠を容認しない。何となれば、之は最高度に描寫物であるからである。即ちそれ自身の中に完結せる世界であり、而も枠はかゝる世界を物質化するからである。

併しながら又、他の場合に於ては、枠なるものが適當しない。或は少くとも要求されないやうに見ゆる。例へていふと、何等かの種類の略畫、即ち油繪略畫が、可觀的に偶然、唯觀照の便宜の爲に、觀照者の欲する儘に、時としてはこゝ、時としてはかしこに、何時でも取去つたり、轉置されたりし得るやうに存在すると假定する。かゝる場合には、恐らくは枠の缺損が、外圍に迄彼れが如き關係の無いといふ事の印象を高める。或は之を積極的に言明すると、全然觀照の自由と關係し之を幫助するといふ印象、如何なる場所にも無從屬の印象、更に簡言すると、純粹なる繪畫の性質を高むるに至るのである。

以上説示したる所の凡ての點中に、彫塑的描寫品の臺に對し、繪畫の枠に對するものと類似し居り而も全然同一でないといふ事項が存在する。此の事に關しては、先第一に、臺なるものは、その性質上、始めから、枠よりもより多く、物質的外圍と結合をなすに適當して居るといふ事が考慮さるべくある。之は常に描寫品をば、床の上から高める。併しながら己れ自らは、いつでも床の上に立ち居り、床と離れる事が能きない。然るに他方の枠そのものは、壁から離れる事が能きる。さうして此の點を別にするも尙、それが、床の上に立ち居るといふ事は、既に、彼の枠が壁に懸つたりそれから垂れたりするよりも、床に對しより密接なる構造上の關係を有するに至らしむる。さうして彫塑的描寫品の臺が立つ所の床、並にそれが興起し居る所の全空間が、特定の技工的生活、即ち建築的生活を表現する事が多ければ多い程、益々多く、臺は、彫塑的描寫品をば、かゝる生活の中に綜織したり、若くはその中に綜織したりするやうに見えしむるのである。

さうして此の如くあるよりして、かの銅版畫が枠に對し拒否的態度に出づると同様に、彫塑的描寫藝術品が、臺に對し、拒否的態度に出づるといふ事が今や特に思念し得らるべくある。よしや此の際、繪畫に比較しての彫塑の特性といふものが、全然同一の理由を生ぜしめないにもせよ、尙然るのである。吾人は之に關しては、いふ迄もなく、小彫塑、隨つて小彫像に迄想到する。さうして吾人は、此の場合には、最も判明に、小彫像の臺をば、描出された形像が立ち、さうして決して缺損する事の能きなくある所の、小彫像の材料から構成された床から區別する。之を例へていふと、吾人が、磁器製又は「マヨリカ」製の小彫像に迄着目するとする。此の種の彫像たるや、都合によると、その「主題」の點に於ては最高の「現實的」のもの、即ち描寫的のものであつて、而も材料や色を含めての表面處理の爲に、全然特異にして、それ自身の中に完結せられ、外圍に對しては異他無縁であつて、單に偶然的に且つ觀照の便宜の爲にその位置に存在するものたるのであつて、之は又、他の位置に存在したり、又は手から手に迄移されたり、吾人の机の上に立つたりする所のものなのである。

而も此の種の小彫像といふものは、同時に、或る意義、即ち材料及び材料處理の點に關しては、最高度に「裝飾的」のものになる事が能きる。それかというて、之迄云ひ居る意義、即ちその外圍に迄從屬といふ意義に於て此の如くなるのではないのである。

されど既に述べたる如く、臺なるものは、各の場合に於て、粹よりもより高度に、統一化をなす所の力を有する。さうして之が故に、前に説示したる種類即ち小彫像の場合に於ては、「形像」詳言すれば十分それ自身の中に完結されあり、單に觀照者の爲に、偶然的に吾人の前に立ち、又他の場所に立つたりするといふ形像なるものは、臺を拒否し、さうして己れ自らの床を要求するのである。若しも此場合に臺を與ふるとすると、此の臺は、單に建築的全體、即ち先第一には机と共に統一化をなし、若くは構造的にそれに迄誘入をする。かゝる臺は、上に説示したる意義に於て、銅版畫又は繪畫的略圖と同様に、如何なる場所に存在もせず、又何等の場所にも附屬しないといふ事を本質とする所の形像に對し、その本質に反對して、一の確固たる場所を作造するやうになる。

此の如くあるが故に、之を一般的に言明すると、臺と粹、並に此等の缺損といふものは、描寫品或は描寫物に對し、全然相反對せる意義を有したり、又は反對せる方向に、此の描寫品或は描寫物の意義を確定したりするのである。之は或る場合には、描寫品或は描寫物をば、より高度に、純然孤立せる理念的世界の帶有者、隨つて固有の意義に於ける描寫物として特徴づけ、又他の場合には、より高度に、かゝる描寫物をば、一層大なる一の物質的全體に附屬するものとして特徴づけ、さうして之と共に、その中に描出されたる生活をば、外圍の物質的生活に内屬及び從屬せしめたりする。此の如くして、臺と粹との問題は、餘りに簡單でない問題のやうに見ゆる。

之が解答は常に次のやうな事に依從する。第一には、如何に臺及び粹が官能するか。即ち分割的に官能するか、又は結合的に官能するか。第二には、如何なる程度迄、描寫物或は描寫品が、それ自身の中に描寫性質を有するか。詳言すれば描出を目的とするか、將た一のより大なる全體の裝飾を目的とするかといふ事である。第三には、何等の程度迄、材料及びその處理により、描寫物或は描寫品が、外圍から分離し、或はそれと共に一の統一體を構成するやうに見ゆるかといふ事である。

三 裝飾的描寫と純粹描寫とに於ける描寫物及び描寫用空間

最後に尙一つの點を眼中に置くべくある。吾人は繰返して云ふが、描寫物が描出をなす所のものは、それ自身の中に完結せる一の理念的世界であると。さうして之が故に、描寫物それ自體も亦、それ自身の中に完結される或るものでなければならぬ。併し又、描寫物が描出をなす所のものは、一のより廣大なる世界に附屬する。即ち敢へて描寫物を圍繞する所の物質的世界ではなく、之に反しより廣大なる理念的世界上に附屬するのである。抑も描寫物なるものは、再生をなすのであるが、而もそれが再生する所のものは、無限なる現實連絡に迄附屬し、さうして此の一部を構成する。之に反し裝飾的藝術品なるものは裝飾をする。さうしてそれが裝飾する所のものは、かゝる一部ではなくて、それ自身の中に完結され居る或るものである。

之を例へていふと、景色畫中に描出された景色なるものは、自然界といふ一の全體中の空間的一部分である。之に反し、一の繪畫によつて裝飾された平面、例へば裝飾的平面なるものは、此の種のものではない。之は全然自

然界に屬しない。之に反し藝術家によつて存在に迄喚起せられ、さうして藝術家によつて附與された所の延長を有する。又純粹なる繪畫に於て再生された景色なるものは、彼れが如き一部としては、自然の勢として、その限界を超越し、さうして自然界といふ全體に迄指示をなす。此の反對に、裝飾された平面、例へば裝飾された平面なるものは、己れ自身を超越して指示もしなければ、又自然界全體に迄も指示をなさない。その始めと終りといふものは、自然連絡中の一部の始めでも終りでもない。さうして此の如くあるが故に、裝飾的繪畫中に描出されたものは、精密に、それが裝飾的である程度に於て、即ち裝飾された平面を活躍化する程度に於て、己れ自身を超越して自然界全體に迄指示をなさない。之に反し、その絶體的の始めと終りとをば、裝飾された平面が、その始めと終りとを有する所に有する。

此の如き事は又、次のやうに表出する事が能きる。裝飾的繪畫なるものは、必然的に、その空間、特にかゝる空間の限界中に迄作曲し、適合せしめられる。さうして此の種の事は、純粹なる繪畫に於ては、決して實行される事もなければ、又實行されてはならぬ。之を言ひ換へると、裝飾的繪畫が正しく裝飾をなす程度に於て精密にその中に描出された生活といふものは、それに於ける被描出物が附屬する所の世界の連絡の外に取出され、さうしてその代りに、被裝飾物の物質的生活の連絡中に進入する。即ちかゝる生活が、繪畫の外圍の物質的生活の連絡中に附屬する程度と同一の程度に、それは、被再生物が取材された所の生活の連絡中に附屬しない事になる。更に之を他語を以て表出すると、描出された生活が、繪畫が存在する所の物質的空間の生活中に適入すると同程度に、それは、繪畫中の被描出物が附屬する所の空間の統一體の外に現出するやうになるのである。

されど、右の如き物質的空間の範圍内に於ては、裝飾された平面なるものは、いつでもそれ自身の中に完結されてある。之は一の部分たるのではない。さうして此の如くあるが故に、その裝飾平面中にある繪畫なるものも亦、それが、その外圍に内屬すると同程度に、一の部分として描出されない。之に反し、散へて、その繪畫中に再生されたものが取材された所の世界といふ統一體を指示する事なしに、尙、それ自身の中に完結されたものなればならぬのである。

そこで、例へば景色畫が一の部分であるといふ事は、それが、その下部の限界を以ては地面その上部の限界を以ては、天又は雲の集叢、左では一の山、右では一の樹木、家等中途切斷する事によつて認識され得る。又人物畫に於ては、吾人は時とすると、人體が、右又は左に半身を以て繪畫中に描出せらるゝのを見る。かくて此の如き中途切斷作用といふものは、繪畫の性質中の一となり居る。此の際重要な事は、かゝる中途切斷作用そのものではない。之に反し、中途切斷の爲に、繪畫が己れ自身を超越して指示するに至るといふ事である。或は又、此の如き重要な事は、被描出物が、描出の限界を超越して自然的に連續をなすといふ事、簡言すれば、それが一の部分として認識され得るやうになるといふ事である。一例を挙げると、繪畫の限界によつて兩分された人間といふものは、その他の半部を指示し、又中途切斷をされた山は、その連續せる部分を指示するのである。

ところが、かの割斷即ち分割作用なるものは、此の如き中途切斷作用とは正反對に立つ。之を例へていふと、若しも繪畫の限界線が、山の中、央を通過する場合には、此の山は中途切斷をされる。然るに若しも分割線が、山の終止する所、隨つて溪谷中にある時には、割斷し分割される。本來中途切斷といふ事は、之を他語を以て表出

すると、連關的のものの特徴づけられ居る所の直接なる連關物を分つといふ事である。之は、獨立的部分、又は比較的獨立せる部分ではなく、随つてそれが爲に全體に迄指示をなすといふ部分を再生する作用である。之に反し割斷といふ事は之と反對に於て、比較的獨立せる部分を相互から分割するの作用たるのである。

吾人は又、彫塑的描寫藝術に於ても、彼れが如き中途切斷の原則に接する。之は自然の理として、例へば胸の中央に於て中途切斷をする。之は頭をば肩と分割せしめない。又、膝迄進行しさうしてそこで割斷をなす所の人間の彫像なるものは、没理である。之は、割斷された下脚を有する人間が描出されてあるといふ印象を起さしむべき危険を有する。

ところが、裝飾的藝術になると、之と反對の原則に支配される。かの裝飾的形體である所の賞牌上には、人間のといふものは、それ自身として描出さるゝ事が能きる。次に繪畫に關して云へば、先づ一の山を中央に於て中途切斷する所の景色畫と、希臘の「パルナス山」と題せらるる所の「ラッフェル」の壁畫、即ち山をば繪畫と共に始終せしむる所のものとを比較して見るがよい。或は又、或る阿蘭陀家屋の室内を比較して見るべきである。之に於ては、室の側壁が、繪畫の枠によつて中途切斷をされて居るのである。或は又「フロレンツ」の「サン、マリア、ノヴェルラ」に於ける「ギルランダヨー」(十五世紀の伊太利の畫家)の裝飾的壁畫とも比較して見るがよい。之に於ては、左方には、繪畫中に於て、部屋の左の側壁、右方には其の右の側壁が、十分なる延長に於て可觀的になり居るのである。

而も此の如く述べ來るといふと、吾人が今の場合に意味せしめようと欲し、さうして「裝飾的繪畫はその空間の中に迄作曲せしめらるゝのに、純粹なる繪畫は此の如き事をなさない」と言明して發表した所のものに對する各個の實例は説示せらるゝのである。否純粹なる繪畫に關しては、吾人は寧ろ、それが、その空間の外に迄作曲適合されると言明する事が能きる。尙此の外に、吾人は、「ラッフェル」によつて、如何に羅馬にある「ファルネシナといふ別荘」に於て、「ヘルメス」といふ神の昇登する所の形像が、天井部の空間の中に迄作曲適合さるゝかの方法、又は、如何に「ミケランジェロー」が、豫言者及び神巫をば、此等によつて裝飾された空間に迄關係せしむるか右と同様の方法を想起して見るがよい。右の「ヘルメス」に於ては、杖を有する腕は、上部の一隅に迄延長する。然るに他の隅といふものをば、天使の翻々たる外套が充填する。又足は、右の天井部の下方の細長い空間の中に迄延長するのである。

此の如き「空間の中に迄」作曲適合を遂げしむる特殊の動力たるものは、結局十分なる均齊となり得る所の右と左との均衡といふものである。

ところが凡て此等の點に關しては、既に述べたる如く、純粹なる「繪畫」の原則といふものは反對に立つのである。之は裝飾的繪畫のなすやうに描寫用空間を充填しない。さうして之に於にも、成程均衡といふものは缺損しない。けれども之は、集塊、即ち形とか、線とか、空間的運動とかの均衡ではなく、之に反し被描出物の印象力の均衡、即ち効力上の均衡である。之は此の如き均衡を計ると共に、形の彼れが如き均衡を否定するのである。されど此の如くあるにも拘はらず、純粹描寫藝術と裝飾的描寫藝術とは、常に相互に移行をすといふ事を考慮すべくある。此の故に又、純粹繪畫が、描寫用空間の外に作曲適合するといふ事、並に裝飾的繪畫が描寫用空



餐食

附註 口演其第一三五等
當其時式三三・三〇八〇等
東京市神田區神田二丁目

同文前

りくやえ
深部大茶
第十二位



東京市	山崎	山崎	山崎
神田区	神田区	神田区	神田区
神田二丁目	神田二丁目	神田二丁目	神田二丁目

昭和六年五月廿五日
出版

東京市神田区
山崎二丁目

Small decorative blue and white mark or stamp on the left edge of the left page.



563
84

